# 重留遺跡

—重留古墳群C－2号墳・重留古窯址の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集

1988

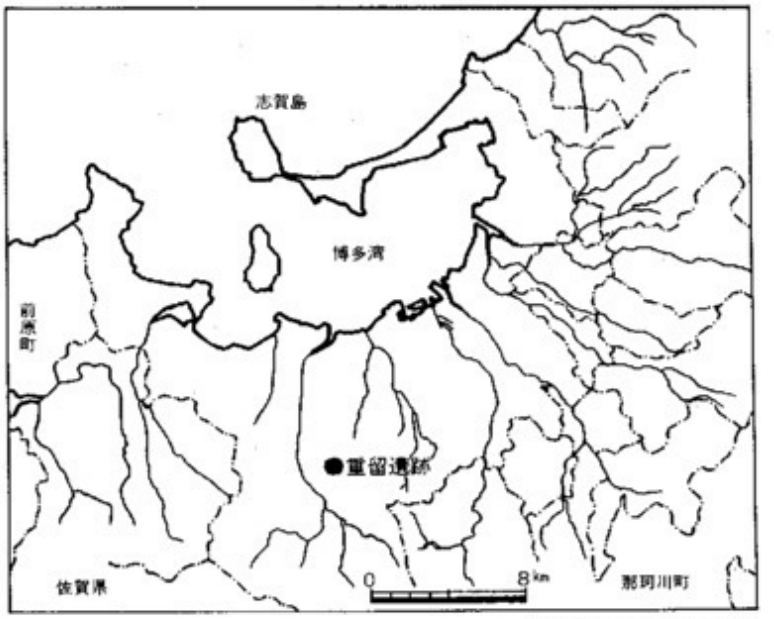
福岡市教育委員会

—題字は安野良氏による—

# 重留遺跡

—重留古墳群C－2号墳・重留古窯址の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集

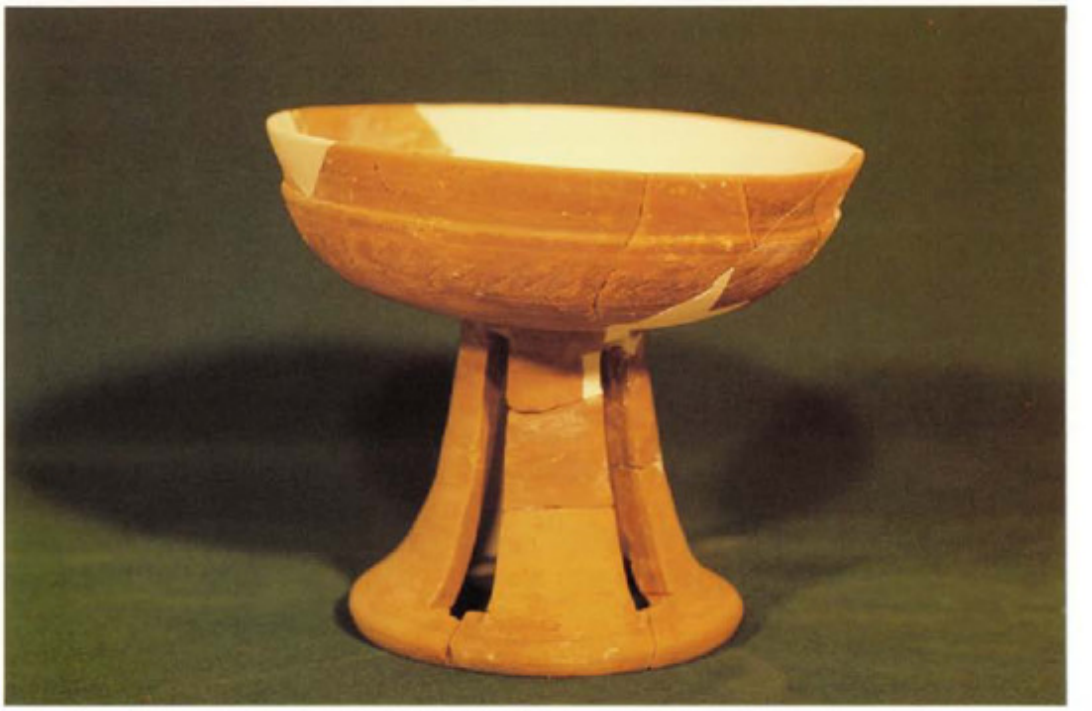



遺跡調査番号 8704（古墳）
8715（窯址）
遺跡略号 STK（古墳）
STY（窯址）

1988

福岡市教育委員会

重留古窯址全景



重留古窯址出土須恵器

# 序　　文

近年、市域の膨張化の中で市域西部では特に開発による遺跡への影響が色濃く出て来ています。

福岡市教育委員会では、このような諸開発による遺跡の消滅を強く懸念し、調査に努めているところでありますが、今回の調査では古墳時代後期古墳とともに須恵器窯址の発見などの多大な成果を得ることができました。

つきましては、この報告書が福岡市域における文化財の理解と認識を深める一助となれば幸いに存じます。

また、調査にあたって諸々の御協力をいただいた各位には深甚なる謝意を表するところであります。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

# 例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が1987年４月～７月におこなった重留古墳群Ｃ群第２号墳および同古窯址の調査報告書である。

2．遺構の実測は瀧本正志、横山邦継が主に行い、他に池田祐司、ザ　煥の両君によった。

3．遺構写真の撮影は瀧本、横山で行った。

4．遺物の実測・製図・写真撮影は横山が行った。

5．本書の執筆・編集は横山が行った。

6．古窯址調査に際して小山富士雄氏（北九州市立考古博物館）の御指導をいただいた。また木炭樹種鑑定では光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）の調査成果を得た。記して感謝するところである。

7．本報告書に収録された遺物、記録類（実測図・写真類）は、福岡市埋蔵文化財センター（博多区井相田二丁目）で収蔵・管理されるので御活用されたい。

## 〈本　文　目　次〉

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
Ⅲ　調査の記録……5
　1　重留古墳群C群2号墳の調査……5
　　(1)　位置と現況……5
　　(2)　墳　　丘……8
　　(3)　横穴式石室……8
　　(4)　出土遺物……13
　2　重留古窯址および周辺の調査……16
　　(1)　窯　　址……16
　　(2)　土　　壙……33
　　(3)　住居址……34
　3　縄文時代包含層の調査……36
Ⅳ　まとめ……38

## 〈図　版　目　次〉

PL. 1　(1)　重留C－2号墳調査前全景（東より）
　　(2)　石室遺存状況（南より）
PL. 2　(1)　墳丘遺存状況（東より）
　　(2)　石室遺存状況（東より）
　　(3)　石室遺存状況近影（東より）
　　(4)　石室遺存状況（羨道より望む）
PL. 3　(1)　墳丘および供献土器出土状況（東より）
　　(2)　墳丘および供献土器出土状況（南より）
PL. 4　(1)　窯址遠景（調査前・東より）
　　(2)　窯址遠景（調査中・東より）
PL. 5　(1)　窯址全景（東より）
　　(2)　窯址全景近影（東より）
PL. 6　(1)　窯体内土層断面（E－E′ライン）

(2) 窯体内土層断面（D－D′ライン）
PL. 7 (1) 燃焼部須恵器出土状況（北より）
(2) 燃焼部須恵器出土状況（東より）
PL. 8 (1) 窯体内須恵器出土状況（最終焼成面・煙道部より）
(2) 窯体北壁補強状況（南より）
PL. 9 窯体床面確認状況（東より）
PL. 10 (1) SC01住居址検出状況（南より）
(2) 縄文時代包含層調査区全景（南より）
PL. 11 (1) C－2号墳出土須恵器
(2) C－2号墳出土玉類
PL. 12 (1) C－2号墳出土耳環類
(2) C－2号墳出土鉄器
(3) 出土縄文時代遺物
PL. 13 古窯址出土の蓋杯・鍔・高杯
PL. 14 古窯址出土の器台・高杯類
PL. 15 古窯址出土の高杯・甕類および住居址出土土師器

## 〈挿 図 目 次〉

Fig. 1 遺跡位置図（1/25,000）…… 3
Fig. 2 重留古墳群採集遺物実測図（1/3）…… 4
Fig. 3 調査区位置図（1/2,000）…… 6
Fig. 4 C－2号墳現況測量図（1/100）…… 7
Fig. 5 C－2号墳丘遺存図（1/100）…… 9
Fig. 6 C－2号墳墳丘土層断面図（1/60）……10
Fig. 7 C－2号墳石室実測図（1/60）……11
Fig. 8 C－2号墳玄室副葬遺物出土状況図（1/40）……12
Fig. 9 C－2号墳閉塞施設実測図（1/50）……13
Fig. 10 C－2号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……14
Fig. 11 C－2号墳出土遺物実測図(2)（2/3・1/3）……15
Fig. 12 重留古窯址周辺調査区全図（1/200）……17
Fig. 13 窯址出土状況平面図（1/60）（折込み）

Fig. 14　窯址出土状況断面図（1/60）（折込み）
Fig. 15　窯体右壁面補強状況側面図（1/40）……19
Fig. 16　窯址第１・２次焼成面遺物出土状況図（1/60）……20
Fig. 17　窯址出土遺物実測図(1)（1/3）……22
Fig. 18　窯址出土遺物実測図(2)（1/3）……24
Fig. 19　窯址出土遺物実測図(3)（1/3）……26
Fig. 20　窯址出土遺物実測図(4)（1/3）……27
Fig. 21　窯址出土遺物実測図・拓影（2/3・実寸）……29
Fig. 22　窯址出土遺物拓影（実寸）……31
Fig. 23　ＳＫ01土壙出土状況図（1/30）……33
Fig. 24　ＳＫ01土壙出土遺物実測図（1/3）……34
Fig. 25　ＳＣ01住居址出土状況図（1/50）……35
Fig. 26　ＳＣ01住居址付近出土遺物実測図（1/3）……36
Fig. 27　縄文時代調査区全体図（1/100）……37
Fig. 28　調査区包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）……37
Fig. 29　重留古窯址の編年的位置図（1/6）……39

# I はじめに

**調査の経過**

1986年２月14日、株式会社北西産業より早良区大字重留地内における資材置場造成にともなう土取り工事の計画が埋蔵文化財課に出された。本課では踏査・試掘を実施した結果、本開発地内に古墳１基（重留古墳群Ｃ群第２号墳）が確認された。このため古墳保存についての協議を重ねたが現状での保存は採土という工事の性格上困難であるとの判断に至り、本調査を実施することとした。尚、同古墳調査中に工区内東斜面で須恵器窯址が発見され、あわせて本調査を行った。

**調査地地籍**：福岡市早良区大字重留字後谷426ほか

**調査対象面積**：13,195㎡（工事対象面積）

**調査面積**：450㎡

**調査期間**：1987年４月30日（Ｃ群第２号墳調査開始）～1987年７月15日

**調査の組織**

重留古墳群Ｃ群第２号墳および同古窯址調査における組織構成は以下の通りである。

| | | |
|---|---|---|
| **調査主体** | 教育長 | 佐藤善郎 |
| | 埋蔵文化財課長 | 柳田純孝 |
| | 埋蔵文化財課第２係長 | 飛高憲雄 |
| | 庶務担当 | 岸田　隆 |
| | 調査担当 | 横山邦継・瀧本正志 |

また、現地調査および整理作業には以下の方々の協力を得た。記して感謝する次第である。

**調査補助**　池田祐司・尹　煥・中島恒次郎・郭鐘喆（以上九州大学考古学研究室）

**発掘調査**　広瀬　梓、高田　茂、因ヨシ子、小柳和子、青柳弘子、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、斉藤国子、富永ミツ子、井上ムツ子、横溝チエ子、横溝カヨ子、横溝恵美子柳浦八重子、倉光信子、井上和子、井上清子、山口タツエ、清末シズエ、結城千代子、井上トミ子、井上磨智子、井上ヒデ子、宮崎フミ子、宮崎栄子、西山秀子、井上千代子、永井鈴子、矢富富士子

**整理作業**　尾崎育子、土斐崎つや子、小森佐和子、田中克子

また、調査の実施にあたって施主である北西産業北山正雄氏、作業現場の方々および地元中村　勝、岩城庄助氏には多大の御協力を賜った。

# Ⅱ　遺跡の立地と環境

福岡平野の西端部に位置する早良平野は、西を飯盛一長垂山塊に限られ、東は油山山塊より派生する樹枝状の小支脈によって東部地域として区別され、ひとまとまりのある完結した小平野をなしている。

平野はほぼ北に展開し、南部に従って高度を増しながら袋状にすぼまって狭隘部をなし（東入部一長峰）、更に南端部で東西に展開する。平野西縁を北流する室見川は、他の支流とともに流域に多くの扇状地、自然堤防を形成し、弥生時代以降の生産活動の舞台をなしている。

ここで重留遺跡に関連する古墳時代群集墳について周辺の諸群に触れることとする。

**(Fig.1)**

重留古墳群は、現存でほぼ7群（A～G）27基で形成されているが、このうち1号墳は、1982年調査で消滅した。また本古墳群と小谷部を隔てた北東丘陵には山崎古墳群（A～B群）9基がある（同図、6・7）更に南に続く平野の東縁をなす三郎丸～東入部にも小単位の群集墳が分布している。

三郎丸古墳群（同図9～12）は、7群（A～C）17基で構成され、1980年宅地造成にともなう発掘調査が行なわれた。またこの南方には荒平古墳群（同図13～19）が分布する。同群は12群31基が確認されているか、何れも群単位は小さく広い分布範囲をなしている。

また平野の西縁をなす西入部の丘陵裾部にも白塔古墳群（同図20・21）－2群19基－や黒塔古墳群（同図22・23）－2群9基－がみられるが以上は未調査のものが殆どでこれからの調査に期する所が大きい。

更に飯盛山山麓をめぐる金武一吉武一羽根戸一野方地区には多くの後期群集墳が多く分布するが、この中でも吉武遺跡群（同図24）のある吉武一飯盛扇状地の先端部を中心とした地区には前方部の短い帆立貝式前方後円墳と考えられる樋渡古墳（5世期前半代）を中心として方墳や5世期後半～6世期初めの円墳群20数基があって、この地域の古墳群形成の初源となっている。また重留古墳群の西側にある灰塚（拝塚）・同図8）は昭和20年代までは現存した古墳で前方後円墳の可能性を残す円墳である。

おわりに重留古墳群C－1号墳調査後に第2号墳との間の地点で採集された須恵器類**(Fig.2)**を紹介をしておきたい。本資料は1986年11月までに、早良区田隈在住の石村栄一郎氏によって採集された。1・2の蓋杯はセットで採集された。1は器色暗灰色を呈し、天井部のほぼ中位より上部まで逆時計回りの回転ヘラ削りを施し、他は内外面ともに横ナデである。口径13.3cm、器高4.1cm。2は杯身で、受部は短く、立あがりも低く内傾する。体部外面の⅓程に回転ヘラ削りを施す。器色は黒灰～暗灰色を呈する。口径11.5cm。器高4.9cm。1・2ともに胎

1．重留古墳群C群（3基）
2．〃　B群（7基）
3．〃　D群（4基）
4．〃　E群（5基）
5．〃　F群（4基）
6．山崎古墳群A群（6基）
7．〃　B群（3基）
8．辰塚古墳
9．三郎丸古墳群B群（2基）
10．三郎丸古墳群F群（4基）
11．三郎丸古墳群E群（4基）
12．三郎丸古墳群G群（4基）
13．荒平古墳群A群（1基）
14．荒平古墳群D群（3基）
15．荒平古墳群E群（2基）
16．荒平古墳群G群（5基）
17．荒平古墳群I群（3基）
18．荒平古墳群J群（2基）
19．荒平古墳群F群（1基）
20．白塔古墳群B群（7基）
21．白塔古墳群A群（12基）
22．黒塔古墳群B群（5基）
23．黒塔古墳群A群（4基）
24．吉武遺跡群（樋渡古墳など20数基）

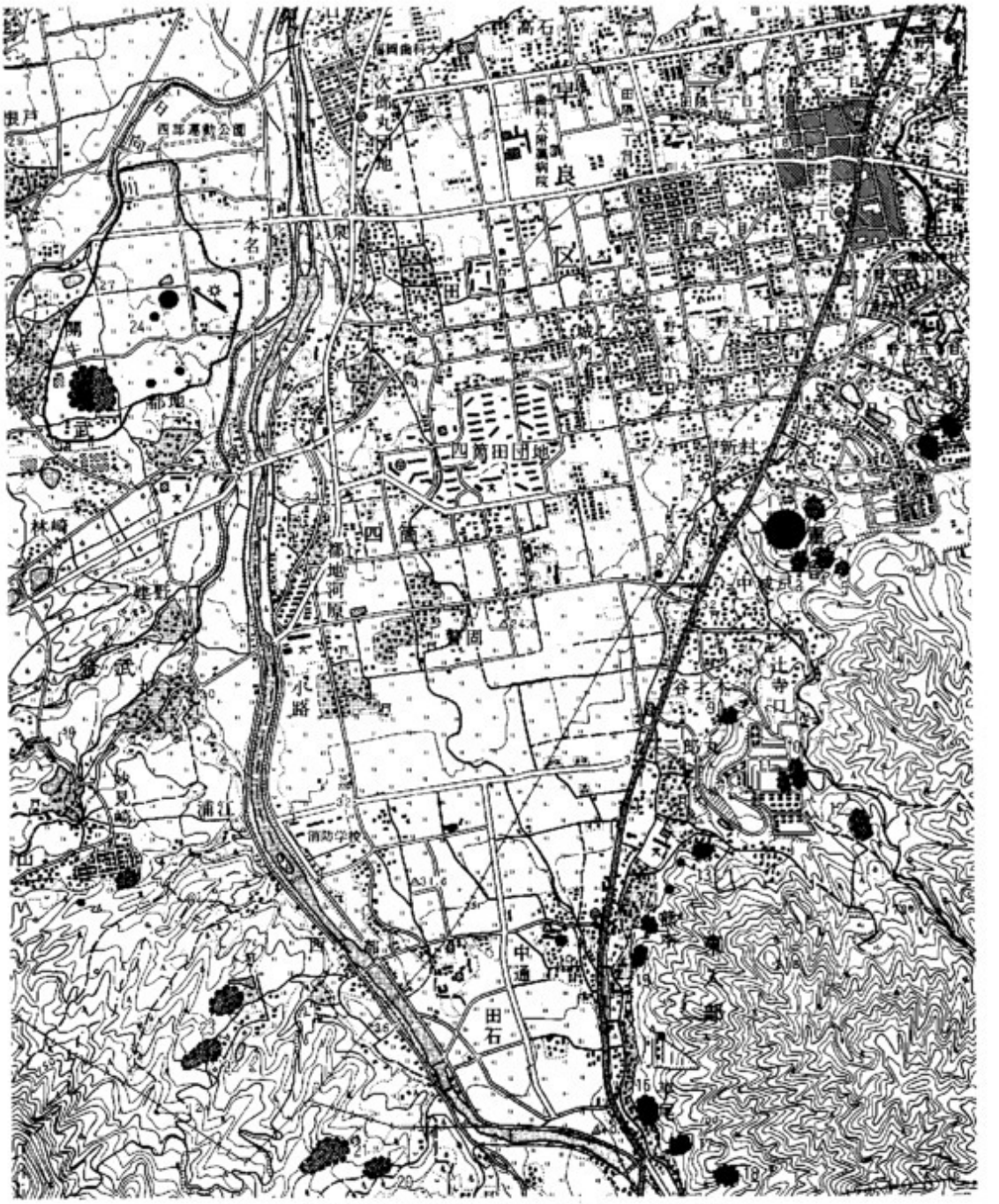



Fig. 1　遺跡位置図（1/25000）（福岡西南部）　※アミは古墳群

土に粗砂を多量に混入し、粗であるが、焼成は堅緻である。3は甕である。外開する口縁部は端部で肥厚し、玉縁状となる。口縁外面には2条の沈線帯に囲まれた部位に波状文が施される。頸部以下はタテ方向の平行叩きを残す。また頸部以上および内面体部上半は横ナデで、体部下半に大振りのあて具痕（青海波文）を残す。口径42cm。頸部径36.4cm。胎土に多量の粗砂を混入する。焼成は堅緻である。

※油山山麓における古墳群調査

① 七隈古墳群　1969年調査、古墳3基、福岡市埋蔵文化財調査報告第124集
② 大谷古墳群、1970~71年調査、古墳7基、福岡市埋蔵文化財調査報告書第19・122集）
③ 彩塚古墳群、1971年調査、古墳2基、福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集
④ 倉瀬戸古墳群、1971年調査8基、倉瀬戸古墳群調査団1972年報告
⑤ 早苗田古墳群C群調査、1972年調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書24集
⑥ 鳥越古墳群B群、1972年調査、2基、福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集
⑦ 山崎古墳群、1974年調査、8基、未報告
⑧ 早苗田古墳群D－10号墳、1979年調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第67集
⑨ 鳥越古墳群E群、1980年調査、(3)基、福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集
⑩ 重留古墳群C－1号墳、1982年調査、1基、福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集
⑪ 重留古墳群A群、1983年調査、1基、平安博物館1984年報告

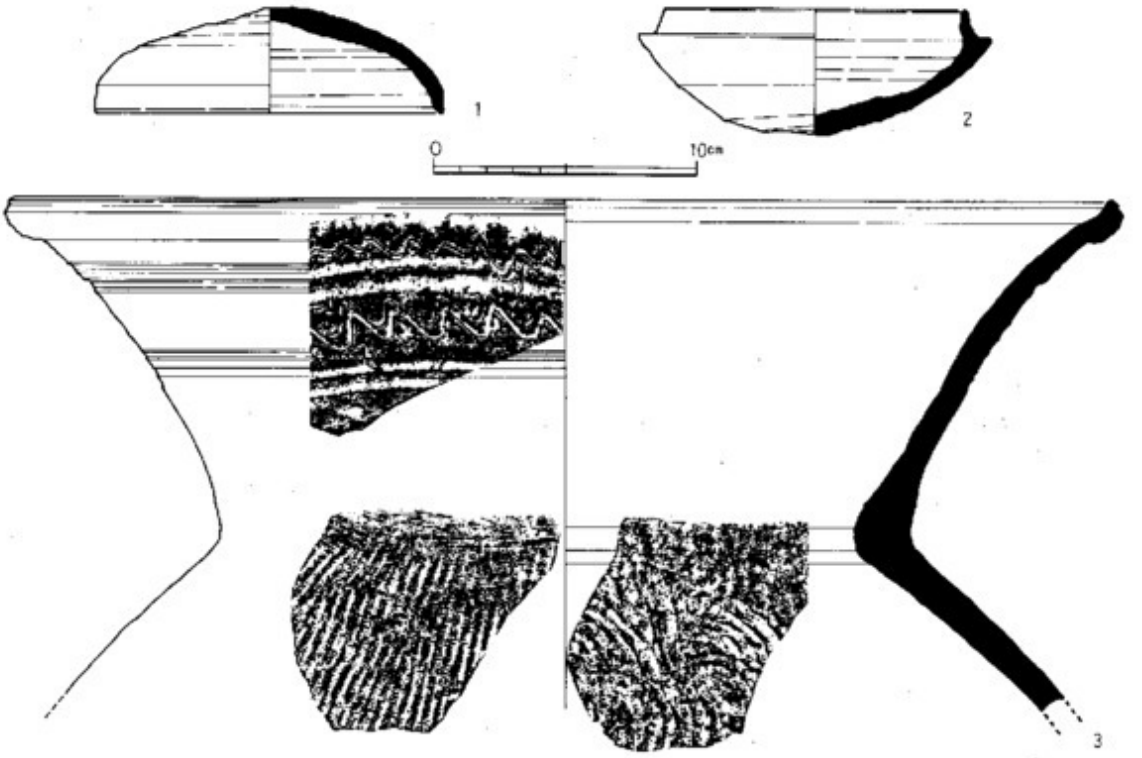



Fig. 2　重留古墳群採集遺物実測図（1/3）

# Ⅲ　調査の記録

**概要**　調査は1987年４月30日より同年７月15日にかけて行った。調査地は資材置場造成のため1982年より採土工事が進められ、北西側一帯が十数メートルの比高差をもつ断崖となり、東側斜面は樫・椎に覆われた自然林をなしていた。調査した遺構は古墳１基、須恵器窯址１基などで２地点に区別される。以下、各遺構について略述することとする。

Ｃ－２号墳　横穴式石室を内部主体とする小円墳で、壁面上部および天井石を欠失する。羨道部に閉塞施設をのこす。原墳丘は羨道に近い西側にわずかに遺存する。墓道もまた西側に直線的に伸びる。副葬品は石室右側壁を中心に出土した。種類はガラス小玉、丸玉、碧玉製管玉、瑪瑙製勾玉、鉄地耳環および工具として鉄刀子・不明鉄器などがある。土器類の出土は少なく東側墳丘部に供献された須恵器甕のみである。

須恵器窯址　調査区東斜面で検出された。ほぼ東西に主軸をとる窯址で、天井部は全て崩落している。窯体壁および床面は１回の補修がみられる。製品は全体にパンケース10箱程の量で甕を最大量とし、器台・鍋・無蓋高杯・蓋杯・台付甕などであり、少ない。

竪穴住居址・土壙　窯址の北側15m 程の斜面に位置し、窯操業時の施設と考えられる。窯搬出の未成甕破片が出土した。

縄文調査区　窯南側斜面で粗製条痕文土器を検出した。周辺に包含層が予想される。

## １　重留古墳群Ｃ－２号墳の調査

### (1)　位置と現況

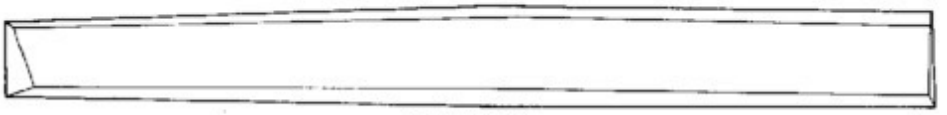
重留古墳群Ｃ群は標高45～60m をはかる丘陵頂部から南斜面にかけて分布する３基の円墳で構成される。

Ｃ群２号墳は油山山塊より派生する小支脈の最頂部（標高60m 以上）に立地し、1982年７～８月に調査され消滅したＣ群１号墳から約60m 程南東部に位置する。

また、第Ⅱ章で略記した様にＣ群１号墳調査後２号墳との間で石材とともに大型甕、蓋杯が採集されており、新たな古墳１基があった可能性が高い。

Ｃ－２号墳は、調査前に墳丘の東側のほぼ全てを削平されており、僅かに羨道部にかかる西側に一部が遺存していた。石室は腰石を除く側壁石材類が全て崩落し、天井上部石材もまた同様であった。しかし石材総量としては不足であり、盗掘にともなう石材の移動があったと考えられる。

Fig. 3　調査区位置図（1/2000）



試掘トレンチ

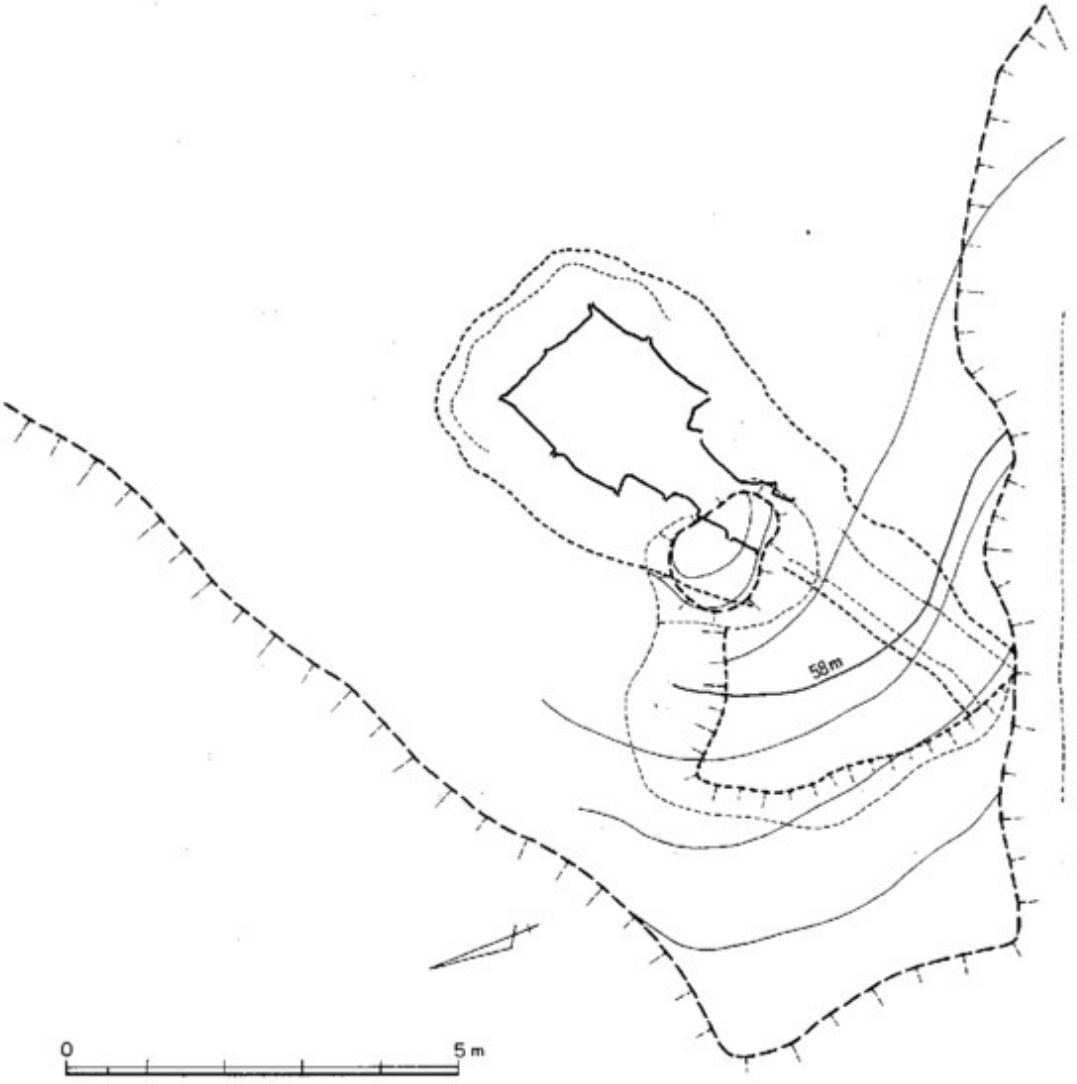



Fig. 4　C－2号墳現況測量図（1/100）

(2) **墳丘**（Fig.5・6）

墳丘は過去の流出・削平の影響が大きく、本来の姿をとどめるのは西側の羨道一墓道部分のみである。墳裾より遺存する墳丘頂部までの墳高1.6m程をはかる。

墳丘盛土は、南・北側で20～30cm、東側で10～20cm程を残し、花崗岩風化粘土である地山（淡赤褐色粘質土）に整形後直接盛っていると考えられる。盛土は地山土と類似する赤橙色粘質土と赤褐色土との混在土を主体として、薄いレンズ堆積の黒色粘質土および淡黄褐色粘質土を互層とする。

墳丘築成には、石室掘り方（墓坑）内の丁寧な裏込め作業が先行しているが、これには少量の花崗岩転礫を混じながら赤橙色粘質土を充満させている。

墳丘規模は、西側で裾部が一部確認できる以外は盛土で判断することが困難である。しかし石室掘方上端から東側へ3m、南側へほぼ3mの位置にほぼ深さ30cm程を残す浅い段落ちが囲繞し、この遺構が墳丘裾部を反映していると考えられる。このことからすると本墳の墳丘規模は、東西11m、南北8～9m程度であり、やや不整な円形を呈する円墳である。

(3) **横穴式石室**（Fig.7～9）

**石室掘方**　墓坑の掘削は地山整形によって平坦にされた地山（淡赤色粘質土）面に行われているが、地山の花崗岩風化粘土は掘方壁面と埋土との区別が容易でなく、掘方上端部の形状を十分に把握できなかった。墓坑は石室奥壁部が最も広く、羨道部に従ってすぼまる形状をなし長辺5m、短辺3～5m、現存の深さ0.8mをはかる部分が石室収納部分の規模である。掘方壁面は、傾斜が緩く、床面は掘方に平行して石室腰石を据えるため幅0.8m、深さ0.2～0.3m程の浅い溝状の掘方がめぐり、ほぼ羨道部でおわると考えられる。尚、掘方壁面は全て淡赤色粘質土である。

**玄　室**　石室は主軸をN－60.5°－E にとる両袖式横穴式石室であるが、このうち玄室は方形に近いいびつな長方形プランである。その規模は奥壁部幅1.5m、玄門部壁幅1.7m、右側壁長1.9m、左側壁長1.9m、玄門幅0.9mをはかる。側壁および奥壁は面的によく整えられているのに対して右袖石が若干羨道側にずれているために石室が全体にいびつとなっている。

玄室は、奥壁・両側壁・玄門部ともに天井石はなく、殆んど腰石のみか、腰石上に更に一石を積む程度しか遺存しない。ここで各壁面を個別にみることにする。

まず奥壁は、二石の腰石で構築される。右側腰石は、高さ0.9m以上、幅0.8m、厚さ0.5m程度の石材（花崗岩）である。また左側腰石は、高さ1m、幅0.85m、厚さ0.30mとなり、両腰石とも若干内傾させて据えられている。

次に右側壁は、ほぼ二石の腰石のみである。奥壁よりの腰石は、高さ0.9m、幅0.95m、厚さ0.35mである。また玄門寄りの壁面は腰石上に長辺を横にして積んだ石材が2石残る。腰石

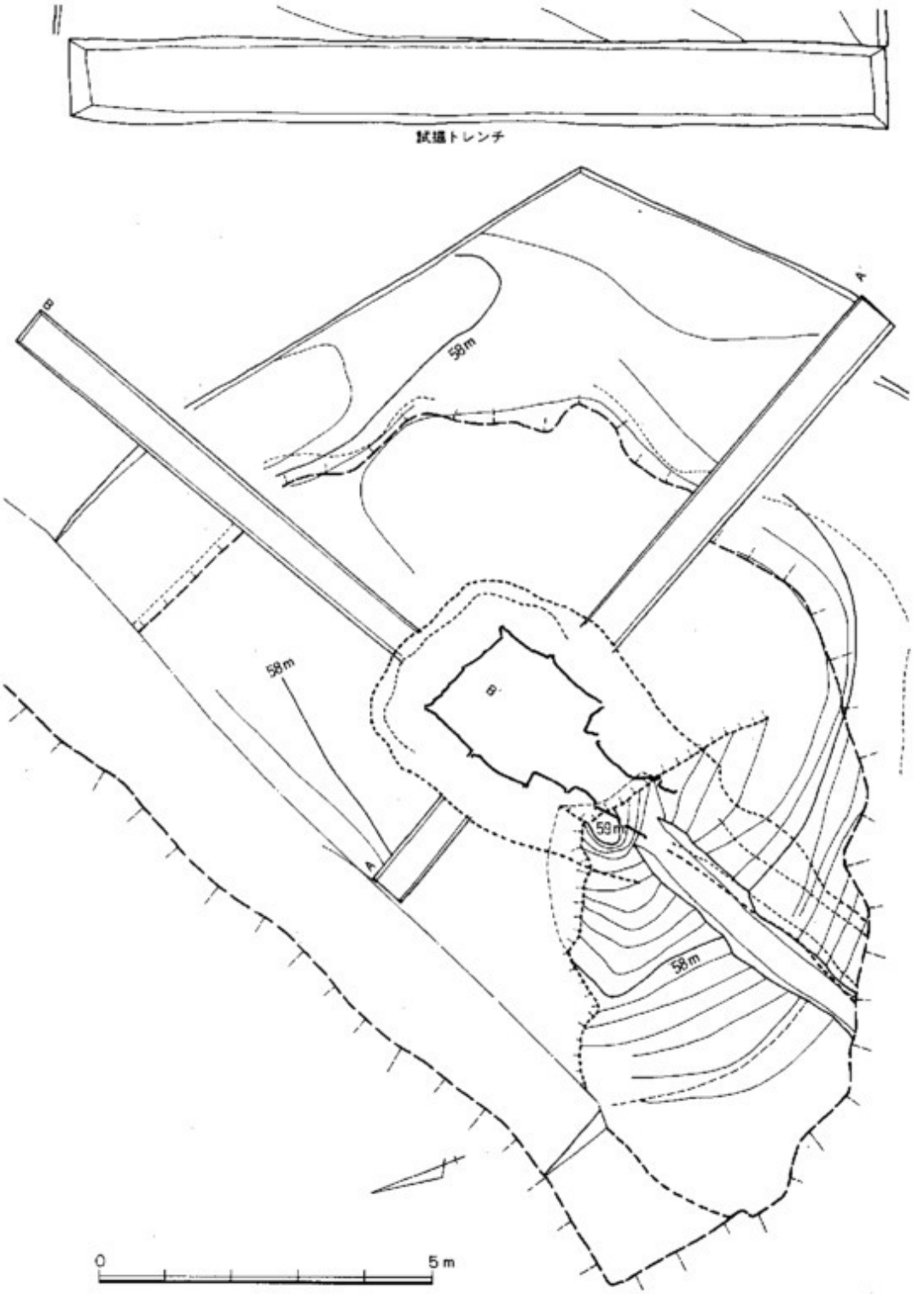



Fig. 5　C－2号墳墳丘遺存図（1/100）

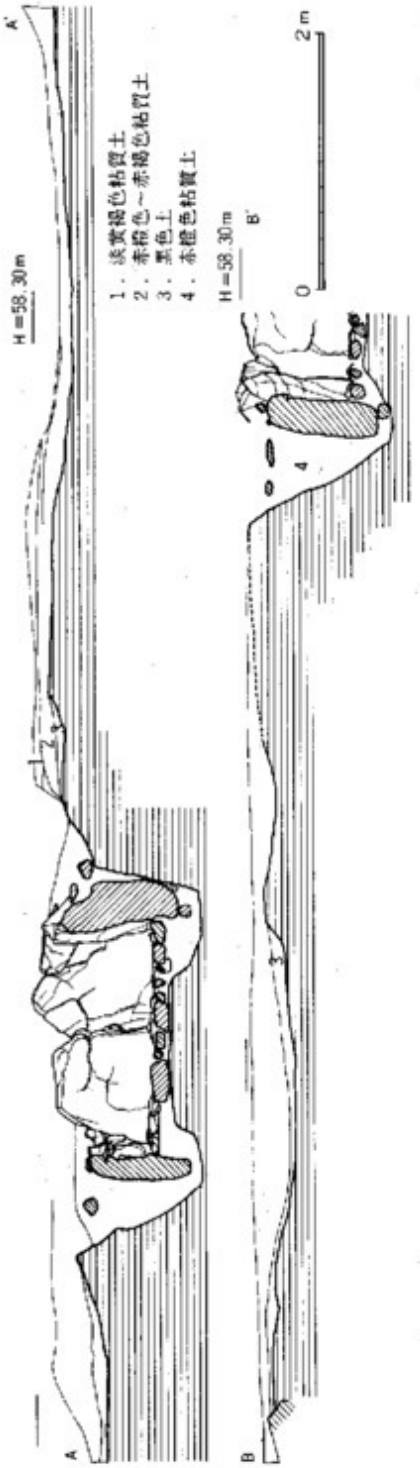



Fig. 6　C－2号墳墳丘土層断面図（1/60）

は、高さ0.4m以上、幅1.05m、厚さ0.35mの比較的横長の花崗岩石材を使用している。

次に左側壁もまた腰石は2石である。奥壁寄りの腰石は、高さ0.4m以上、幅1.15m、厚さ0.35～0.4mをはかる石材を使用し、この上に、長さ0.9m、幅0.65m、厚さ0.15～0.25mの扁平石材を積む。また玄門寄り腰石は、底面が広く、頂部のすぼまって尖る「おむすび」形の石材を使用する。この形状の石材はこの地域では玄室奥壁中央石材として使用される場合が多くある。石材規模は、高さ0.8m以上、幅1.20m、厚さ0.52mをはかる。

また玄門では、右袖石が高さ0.8m以上、幅0.5m、左袖石が高さ0.75m以上、幅0.6mとほぼ同程度の大きさの四面体をなす柱状石材を使用している。

次に玄室床面は、左側壁部付近が一部欠損する以外は全て石敷き施設を残している。これはほぼ120個以上の扁平礫を使用し、最大の石材は長さ0.4m、幅0.25m、厚さ0.15m程度であり、これに長・幅が0.15m・厚さ0.05m程のものを混じている。構成はパズル様に大型石材を敷いた後に小型石材でこれらのすき間を埋める方法をとっている。石材は何れも花崗岩で、最も大きい平坦面を床面上面に据える様に工夫されている。

それから玄室内では装身具および鉄製工具が右側壁の奥壁に近い部分に集中して出土した（Fig. 8）。これらは総数28点であり、このうち原位置をとどめて出土したのは20点であり、他は玄室内埋土の水洗によって得たものである。

装身具および工具の数構成は、前者が26点、後者が2点である。このうち装身具は、ガラス小玉1点、同丸玉10点、碧玉製管玉11点、瑪瑙製勾玉

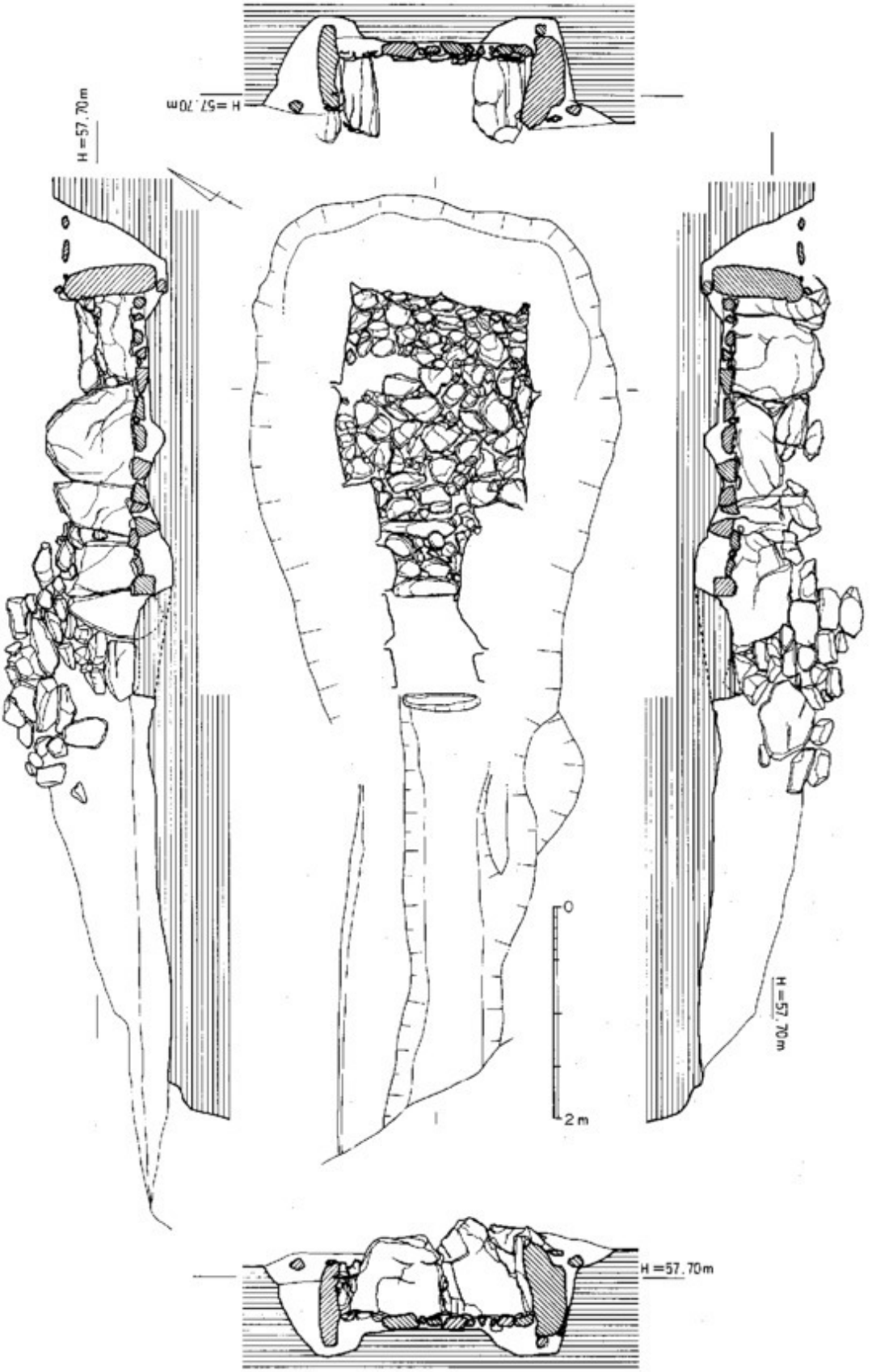



Fig. 7　C－2号墳石室実測図（1/60）

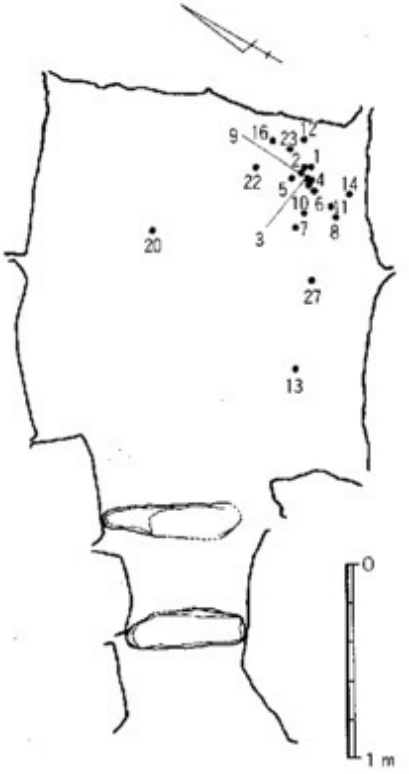



Fig. 8　C－2号墳玄室副葬遺物出土状況図（1/40）

1点、鉄地耳環3個である。また鉄製工具は、刀子および不明鉄器各1点である。以上出土した遺物類は、前述のように奥壁右隅部を中心として一対の耳環（Fig. 8－11・12）に碧玉管玉・ガラス玉類が近接して出土し、埋葬一体と認め得ると考えられる。更に別の耳環（Fig. 8－13）がやや玄門近くに位置し、ほぼ玄室中央には通常一連の玉飾の親玉となるべき瑪瑙製勾玉がみとめられる点では少くとも2体の埋葬があったと考えて良かろう。また、これらの遺物以外では通常のポピュラーな副葬品である須恵器の出土が全くなく、本古墳の使用期間を明らかにする事は困難である。

**羨　道**　玄室に続く羨道は、全長にして僅か1.3m程度の規模である。床面には2個の梱石が配されている。玄門側の梱石は羨道部閉塞の根石として利用されており、長さ0.7m、幅0.2m、厚さ0.25mをはかる。また羨門側の梱石も一石であり長さ0.62m、幅0.2m、厚さ0.22mの細長い石材を使用している。この2個の梱石間は、14個程の扁平転礫で埋められている。

また羨道側壁は、右側で1石、左側2石の使用で構築されている。右側壁の石材は、高さ0.6m以上、幅1.15m、厚さ0.3m以上の比較的大型石材を使う。また左側壁の2個の腰石は何れも高さ約0.7m、幅0.4m程の石材を立てている。それから羨道部腰石の西端部は前記の梱石程度の長方形土壙となり、他の石材が立てられていた可能性がある。また羨道部床面は、石室掘り方掘削時に一度敷石部底面まで下げられ、その後花崗岩風化粘土を埋めてつくられている。

更に羨道部には天井部に架構された一石が残る。これによると天井の高さは約1mである。この天井石材は床面の両梱石の中間に位置しており、これより外側には天井石が存在しなかったあ、あるいは多くても1～2石の程度と考えられる。

**墓　道**　羨道に続く墓道は南西方向に約3.6mが検出できた。壁面は墳丘盛土との区別が困難であり、特に北壁は不明瞭であった。規模は上端部幅で1.2m以上、下端部幅0.5m程度であり、床面は緩く下降する。

**閉塞施設**（Fig. 9）　羨道閉塞施設は前述の様に羨門側梱石を根石とし、この外側に高さ0.7m、厚さ0.15m程の板石を立て、この上部に径0.2m大の転礫をつみあげて天井部に至ってい

る。併し石材による閉塞工作は天井部に近い2～3石であり、これ以下の大部分のところは淡黄褐色粘質土をつみあげた後におこなわれている。図上で玄門側に散在する礫類は多くが原位置を保たないものである。

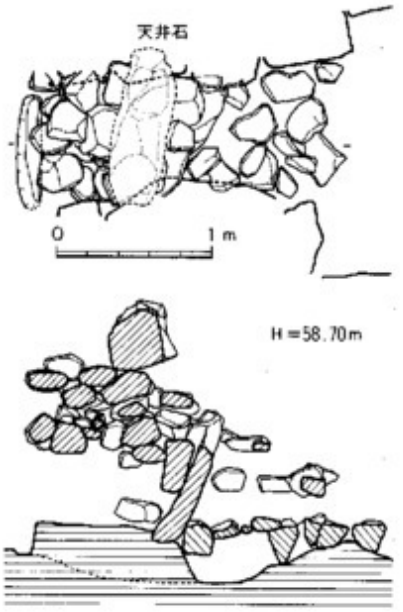



Fig. 9　C－2号墳閉塞施設実測図（1/50）

**(4)　出土遺物**（Fig.10・11、PL.11・12）

出土遺物は前記の様に装身具（玉類、耳環）および工具類である。何れも玄室床面あるいは玄室内埋土内で出土した。尚、墳丘東側裾部で供献須恵器の一群が出土した。

**装身具**（Fig.10、PL.11・12）

玉類　構成は小玉1点、丸玉10点、管玉11点である。ガラス小玉26はスカイ・ブルー色を呈し、径4㎜である。また同丸玉5・8・9・7・25・2・6・22・23・24は何れもコバルト・ブルー色を呈し、径8.5～6㎜の範囲にはいる。また管玉は、19がライト・グリーン色を呈し、径4㎜と小形である以外は全てダーク・グリーン色の碧玉製品である。後者は全て片側からの穿孔であり、長・幅が1.55×0.5㎝より2.6×0.8㎝のものまである。

次に勾玉20は、黄褐色を呈する瑪瑙製で、全長3.35㎝，最大幅1.2㎝をはかる。尚、穿孔は片側からである。

耳環（11～13）　3点が出土した。出土位置から耳環11・12は対をなす。形態的には耳環12が後の自然営力によって変形しているが、基本的には何れも突合せ部の狭いものであろう。また材質は鉄地であるが、他に金あるいは銀箔をおいた痕跡はみえない。耳環11は、内径1.8～1.9㎝、断面径3㎜の円環である。同12は、変形のため突合せ部がずれているが、サイズは11と同様となろう。それから耳環13は、玄門袖石に近い床面の出土である。他の2点と同様に内径1.9㎝、断面径3㎜をはかるサイズのものであって、全体に重量感に乏しい製品である。

**工　具**（Fig.11・27・28、PL.12）

工具と考えられるのは2点である。27は右側壁部床面で、他は玄室内埋土の出土である。28は鉄刀子である。身部先端を欠損するが、現存長9.4㎝をはかる。茎との境に板状の装具を残し、この周辺に柄部に関わる木質部が痕跡的に残る。刃部はやや湾曲し、断面形は楔形をなす。27は一見鉄刀の刃部破片ともみれるが、背部に稜をもち、一端がすぼまる形態をなす点で工具

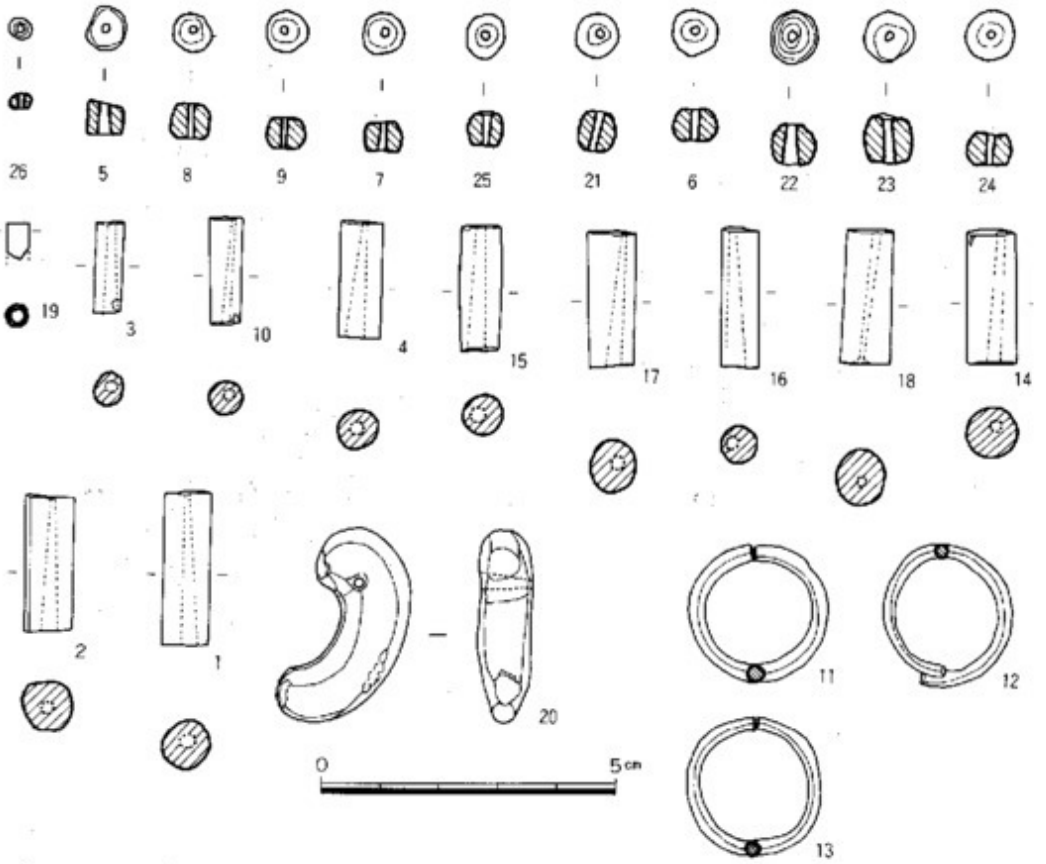



Fig. 10　C－2号墳出土遺物実測図（1）(2/3)

としておく。現存長・幅7.3×2㎝程で、刃部断面形は楔形となる。

**須恵器**（Fig.11・02001）

須恵器は墳丘東側裾部で一括出土したのみで他にはない。器種は図示した以外に中形甕・杯があり、何れも細片である。02001は、全体に胴部の膨らみのいびつな甕である。口縁部は緩く外開し、胴部肩の位置が高い。底部付近は、比較的すぼまり、外底部は不安定な平坦面をなす。また器面調整は、外面荒い平行叩き後に単位10本前後のカキ目状横ナデを十数条加える。これは頸部にも同様である。内面は、口縁部横ナデで、胴部は上半にあて具痕（青海波文）を残し、以下は平行叩きが底部を除き残る。口径18㎝。器高48.9㎝。暗灰色を呈し、焼成堅緻。

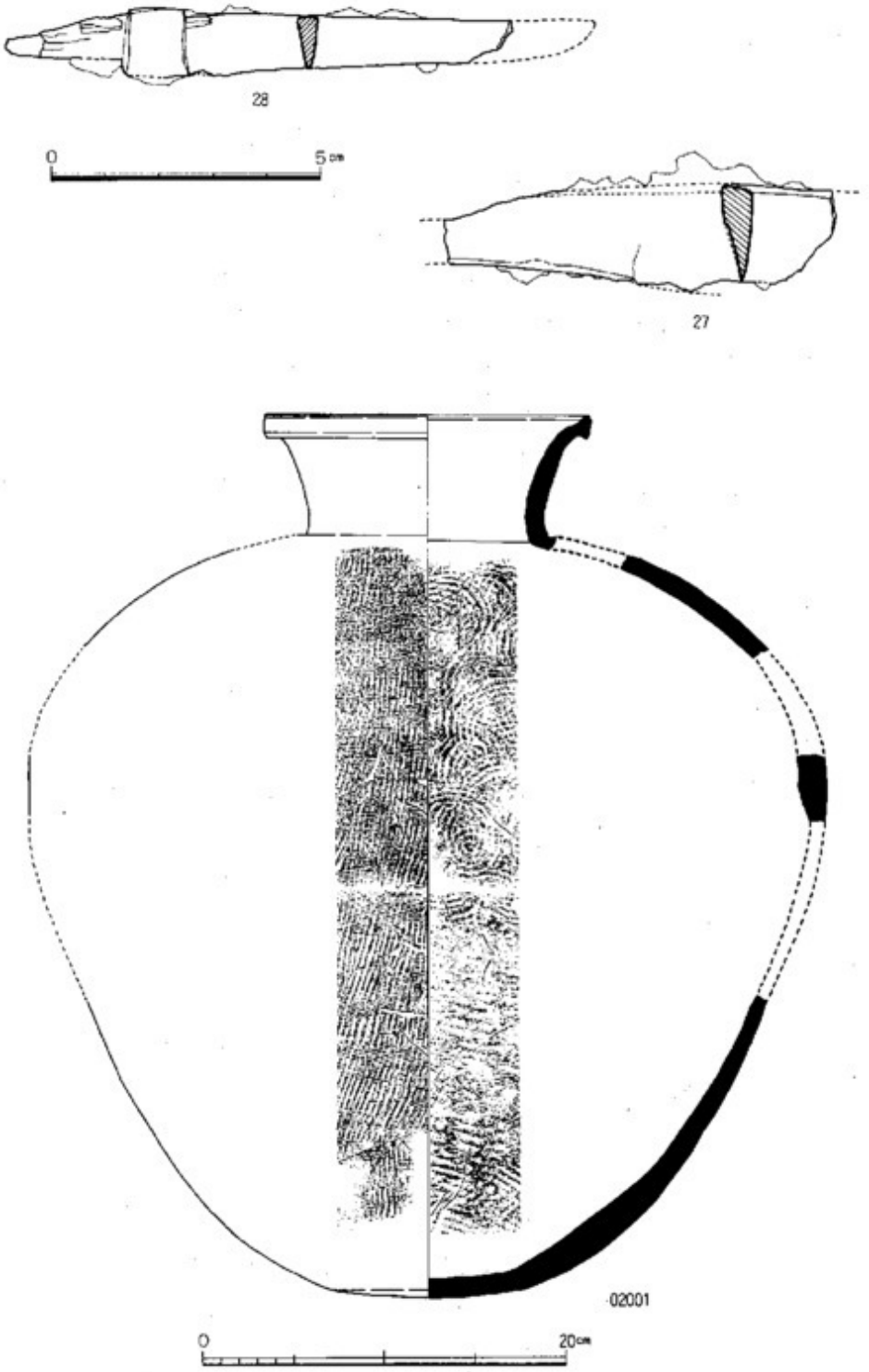



Fig. 11　C－2号墳出土遺物実測図（2）(2/3・1/3)

## 2　重留古窯址および周辺の調査

**概要**　重留古墳群C－2号墳調査中の踏査で開発地内の東側斜面で多量の炭水物と須恵器の半製品杯類が採集されたため併行・継続して本地区の調査を行った。

調査は灰原を中心として東西、南北方向にトレンチを設定した。試掘では後の焼成部・燃焼部にあたるトレンチで地山面の赤変と剥落窯壁片の混じる埋土から窯址と確認するに至った。

また窯址確認後、複数の窯址がこの東側斜面に存在するものと考え、斜面傾斜に平行するトレンチを窯址の北側を中心に計８本設定した。この結果は窯址の北側15mに設定したトレンチで窯操作時に併行すると考えられる竪穴住居址１軒、土壙１を検出したにとどまり、他は表土下に黄褐色粘質土、次いで地山の白色花崗岩ばいらん土（地山）と続く単純な自然層を確認した。トレンチ調査と調査後の工事立合いに於ても窯址は複数の遺存が確認できなかった。

更にC－２号墳および窯址埋土内で縄文土器片、少量の石器類が出土したので窯址南側に調査区を設定した。以下、各遺構について詳述することとする。

### (1)　窯　　址（Fig.12～16、PL.4～9）

#### ①　遺　　構

**概要**　窯址は南から北に展開する小丘陵の東側斜面に主軸をN－96.5°－Wに向けて構築されている地下式無階無段式登窯である。焚口付近の標高は海抜56m程である。窯体は全長９m、最大幅（焼成部）2.5m、天井高（焼成部）1.8m以上の規模であるが、調査時には床面および壁面に長・短が２×１m程の大型転礫（花崗岩）が落下しており、操業廃絶の原因の一端はこれにある可能性もある。

また床および壁面は少なくとも１回の補修が認められる。窯体内および灰原からの製品の出土は少量で、ほぼパンケース10箱分である。

**焚口**　灰原に向って急激に開く部位がこれに当ると考えられ、床面幅でほぼ１mをはかる。壁面はほぼ垂直に立ち、床面は暗赤褐色に堅く焼けしまっている。現地表から床面はほぼ1.2mをはかり、埋土は暗褐色～黄褐色土で窯壁片を含まず、床面に炭化物を残す。また床面において熱による改変の及ばない部位には表灰色粘土を掘方上面に貼付する表面の整形作業が観察され、他の窯体内部の保全と共通する点がある（Fig.14）。

また前部にあたる前庭は、南北掘り方幅６m、底部幅（東西）１mをはかる狭長な規模である。南側は二段の掘り方をなす。前庭部では焚口正面から外れた左右の床面に掘り方径20cmをはかる柱穴が認められ、柱痕跡は径５～７cm程である。これらは対称的配置から焚口部あるいは作業場の覆屋的支柱である可能性がある。

**燃焼部**　焚口から窯体床面傾斜変換部までの長さ２mがこれにあたる。併し作ら傾斜が非常

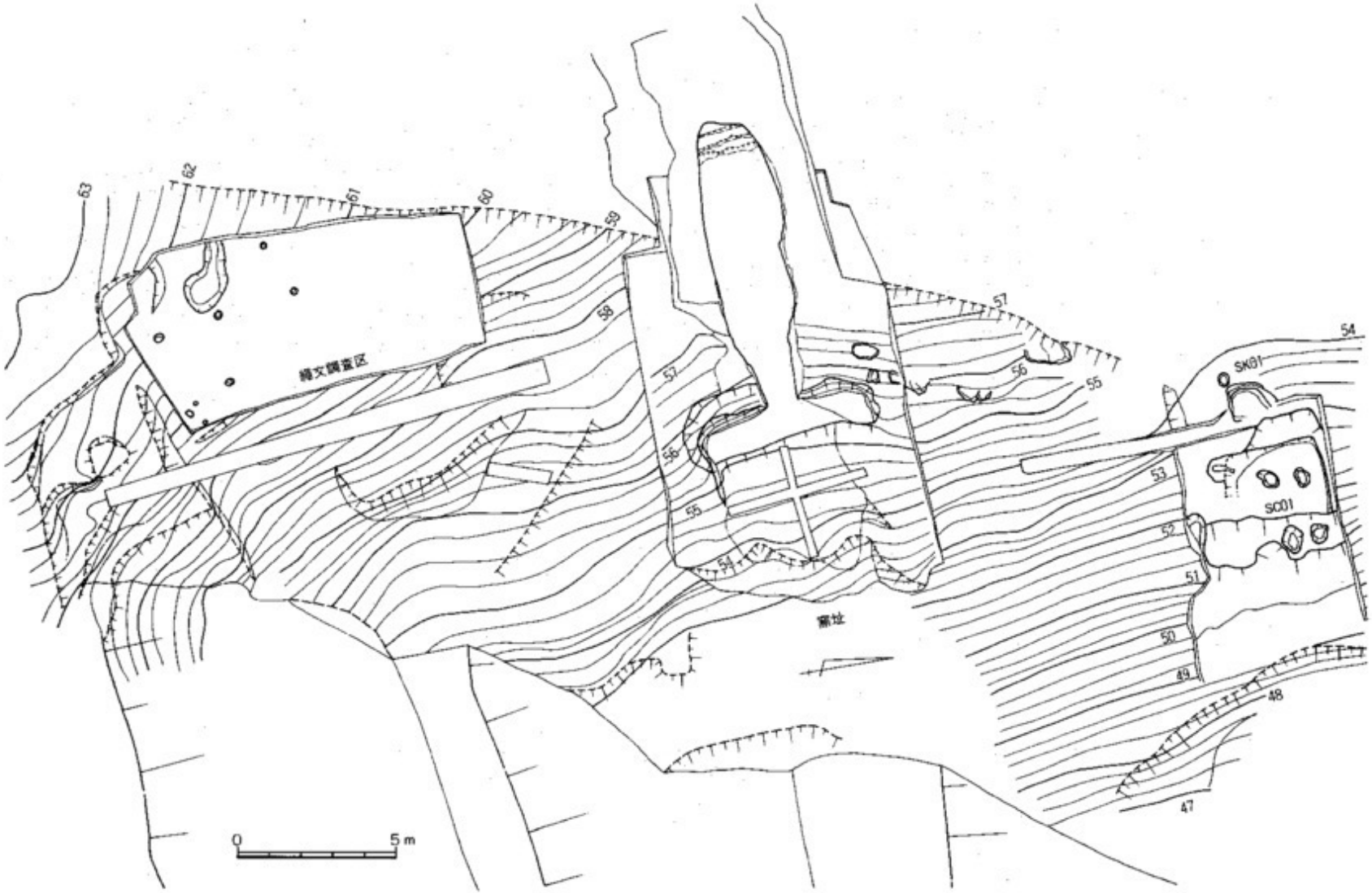



Fig. 12　重留古窯址周辺調査区全図（1/200）

に緩いのでこれ以上に長い可能性もある。幅は最奥部でほぼ2mをはかる。現地表から床面（最終面）まで2.1mをはかる。埋土は最終床面上に須恵器・窯体片を混じる黄灰色砂質土の薄層がのるが、これ以降は厚さ1mを越す暗赤褐色土や径80cm以上の大礫が転落し、急激に埋没したと考えられる。

ところで燃焼部とこれから排出された灰原には燃料として使用された木材で炭化してなお、比較的原形を留めるものがあったため樹種鑑定を奈良国立文化財研究所光谷拓実氏にお願いした。

鑑定資料は全部で13点である。このうち3点についてはアカガシ亜属、他の10点は全て広葉樹であるとの結果を得た。このことは早急に結論する事は危険であるが、燃料の供給源が窯操業開始時の周辺二次林に依存していたものと考えることもできよう。

**焼成部**　燃焼部から床面が傾斜を変え、幅員の増大するほぼ6m程が相当し、中央よりやや上った位置で最大幅2.5mをはかる。床面傾斜角度は燃焼部との境付近で約10度程で上部に従って急激となるが、最大でも約16度を前後するものであり、非常に緩やかとなる。

窯体のうち特に焼成部の床面および壁面には丁寧な構築作業が施されている。床面では1回、壁面でも1回以上の補修が行われている。壁面のうち左側壁は遺存が不良で、殆ど掘り方立あがり部に一部壁体を残すのみであるが、右側壁部は掘り方の下部ほぼ⅓程度にスサ入り粘土の壁体が遺存する。尚、右側壁は窯掘り方作業時から壁面が弱体であったらしく燃焼部との境からほぼ焼成部中位まで石組みによる補強が加えられている（Fig.15）。規模は、延長2.5m、奥行0.8m、高さ（床面より）1.2m程である。焼成部断面（Fig.14、C－C′）線よりあがった位置にある前面で長・短が1×0.3m程の長角礫を根石として径40～10cm程の角礫40個を使用し、壁面を築いている。補強部の下部および石組み内面は土を充満させており、特に石組み内は若干熱を受けており淡い赤褐色土となる。

一体に本窯を含む周辺の層位は、白色花崗岩バイラン土を地山としてこの上に厚い花崗岩風化粘土（赤褐色粘質土）が乗るがこれらには何れも径が1mを越す転礫を多く包含し、掘削やその後の水の浸透によっても容易に崩壊をおこす事から、また本窯の築成にも多大の影響をもった点は否定できないであろう。

焼成部の埋没はまた最終焼成面に僅かの薄層を積せた後に急激になったと考えられる（Fig.14、D－D′・E・E′）。

次に床面は前述の通り、一回の補修をはさんで上・下二面に区別が可能である。これを下層－第一次焼成面、上層－最終焼成面とする（Fig.16）。尚、上・下層の焼成品は、燃焼部で両方の製品が混在しているが、原位置を保った焼成部各層と接合が可能なものが高杯などにあり、焼成時間が近く、また操業期間もかなり短いことがこの事から知れよう。

まず第1次焼成面（下層）では、原位置をとどめた製品は量的に少なく、僅かに11点である。

Fig. 13 窟壮出土状況平面図 (1/60)

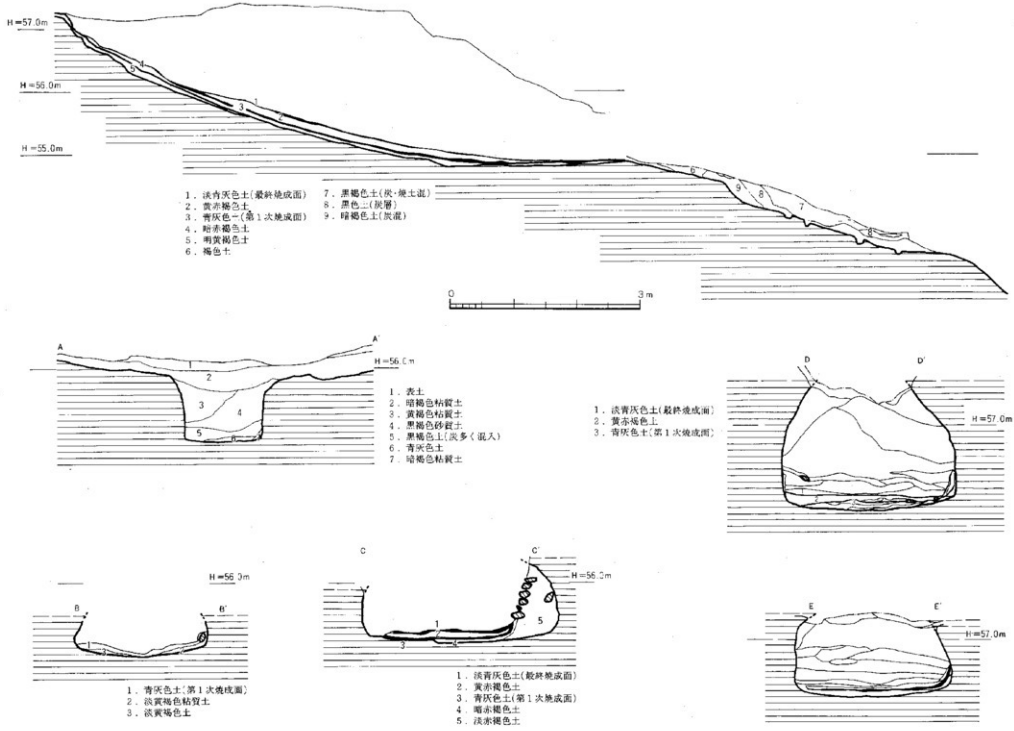



**Fig. 14** 窯址出土状況断面図（1/60）

出土位置では、左側壁燃焼部との境には無蓋高杯々部破片、焼成部中位中央部で杯蓋破片などがあるが、他は全て大型甕の胴部破片である。そして右側壁燃焼部近く（径30cm）と焼成部中位の小竪穴（径60cm）は甕形土器の底部を安定させるためのものであり、燃焼部のものには内部に3個程の平板な礫がおかれる。また右側壁の竪穴には甕底部の破片が残る。更に左側壁の上部から燃焼部との境までの間には長径10～15cm程の平板な角礫がおかれ、火に遭ってパン状になっている点で製品の置台（焼台）と考えられる。

次に最終焼成面（上層）は、第1次焼成面に10～15cm程の淡黄褐色粘質土を埋土としてこの上に粘土補修を行なっているため、更に窯床面の傾斜は緩くなっている。

最終焼成面は、燃焼部との境に残る土器類も多量であるがこれらも加えると計216点程の破片が確認できる。

特に原位置を保つ破片類は、焼成部中位から上部にみられるが、目立つものは大型甕破片を花弁状において製品の置台（焼台）としたものがあり、これらは二次的焼成を裏付ける様に器壁が膨張して破裂している。この置台(焼台)は左・右側壁部を通じてみられ、第1次焼成面でみられた小土壙を掘る例はない。これらの置台と考えられるものの周辺では右側壁部上部で杯蓋、左側壁部の中位付近で杯蓋、無蓋高杯々部、脚部などがみつかったが最もポピュラーな製品である甕がそれほど明確でなく、少くとも明らかなことは高杯（無蓋）・蓋杯・鼎・器台類が最終焼成面で焼成されたことである。

上・下層では焼成部床面において明確な相異点は下層で、大型甕等を置くためのものと考えられる浅い円形土壙や花崗岩扁平礫を使用した置台を床面に並べるのに対して、上層では主として以前に焼成された大型甕胴部破片を使用する置台を床面に配置するものである。これは下層で焼成されていた大型甕の焼成がやめられ、上層ではこれ以外の小形の器種に変化していったものか判断が困難であるが、両層でも共通するのは杯・高杯の器種である。何れも還元焼成時の処理が悪い未製品が多い。

**煙出し部**　奥壁部は緩く立あがり、現行0.25mで、煙道部と素直に接続すると考えられる。重機による削平で失なわれているが、立あがり上端部は熱のため赤色に変化している。

**灰原**（Fig.13、PL.5）　灰原は前記の様に焚口から続く前庭部の傾斜変換線を境に東へ4m、南北幅4.5m程にひろがる小規模の

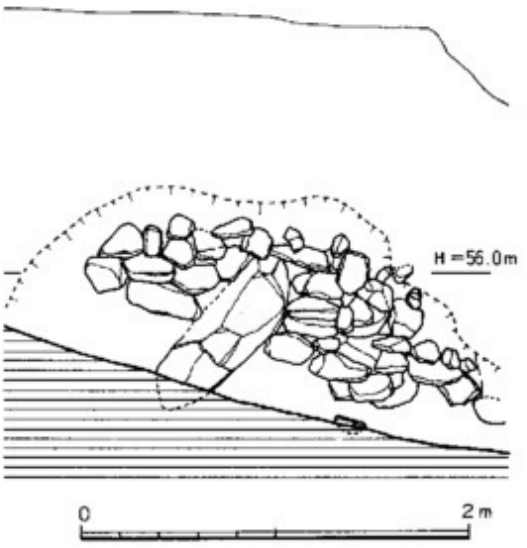


Fig. 15　窯体右壁面補強状況側面図（1/40）

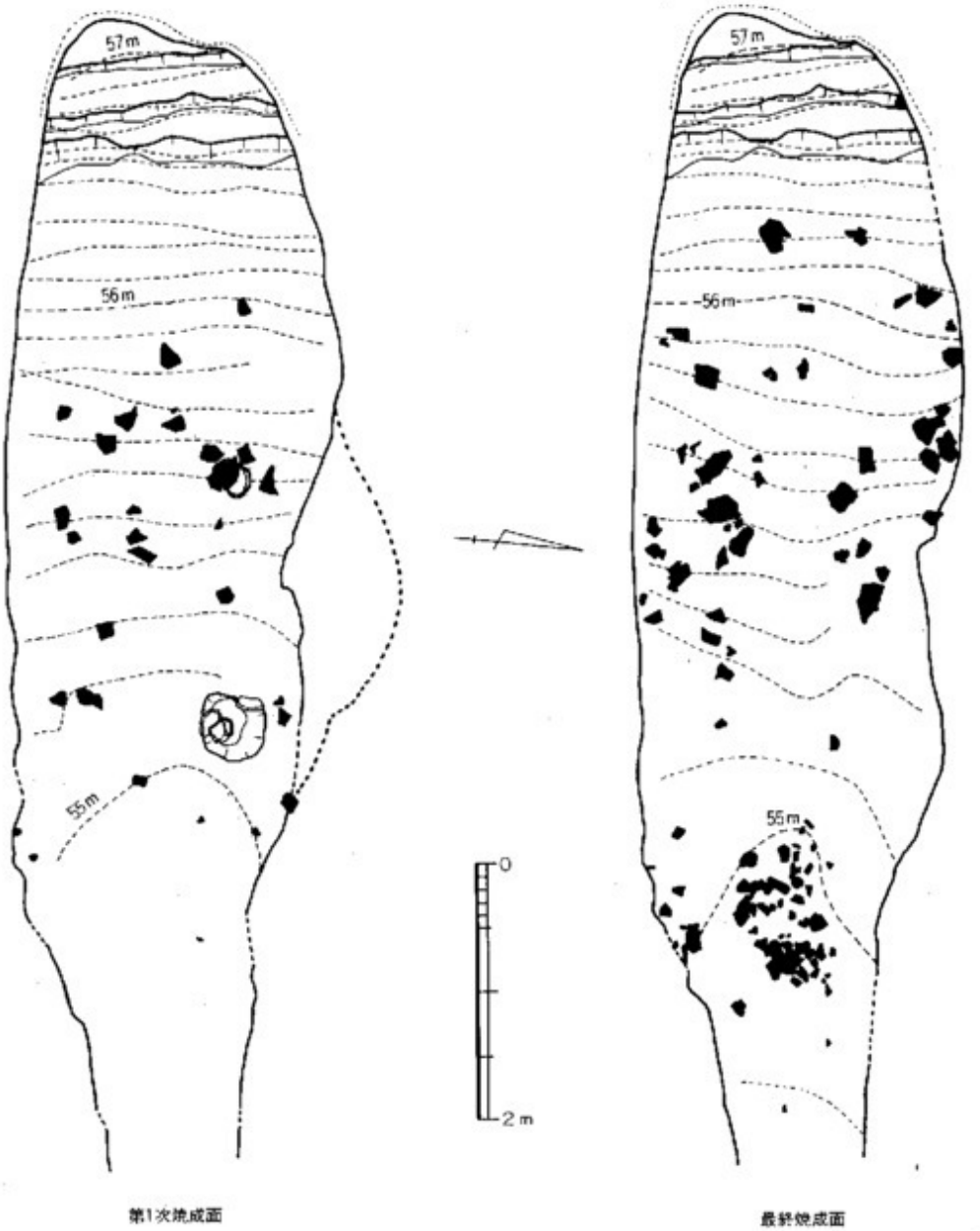



Fig. 16　窯址第１次・最終焼成面遺物出土状況図（1/60）

ものである。これは本窯址のある谷部に対して行われた防災工事（昭和57年頃）による影響を最も強く受けた結果と考えられる。

灰層は流出によって厚さ20～40cm程が残るが、層位的に分けられることなく、須恵器類の発見も極端に少ない。灰・炭化物層除去後は、東西３ｍ、南北4.5ｍの不定方向に段をなす竪穴状遺構があり、この中には柱穴を含む小穴が無規則にみられる。

灰原では埋土内から杯蓋・高台付甕底部（外面格子叩き）、馬形陶製品など17点が出土したにとどまった。

② **出土遺物**（Fig.17～22、ＰＬ.13～15）

窯址出土の遺物は前述の様に焼成部上・下層および燃焼部の最奥部床面、灰原からのものでほぼパンケース10箱分であるが、これらの内訳は焼成部下層（第１次焼成面）で28点、同上層（最終焼成面）で219点、灰原で18点がある。他に焚口部で11点、表採品など17点がある。

更に、以下に図示した遺物類には出土位置によって番号を付し、区別を行った。

焼成部上層（最終焼成面）で0001～00100～00201～、同下層（第一次焼成面）で00601～、焚口部 00301 ～、表採・トレンチ出土品 00401 ～、灰原 00501 ～としている。

図示したものは、瓵・蓋杯・高台付甕・高杯・器台・甕である。この中で甕は口縁部・頸部などの特徴を示す部位が殆んど見付けられず、拓影によった。以下、各器種について特徴を述べる。

ａ．**瓵**（Fig.17、ＰＬ.13）

瓵は、頸部および胴部破片が出土せず、ほぼこの口縁部４点のみの出土である。

瓵00306は、生焼けで内外面ともに暗赤褐色を呈する。口縁部は端部が丸く、内端は沈線状に窪む。外面は反転部との境界に一条の沈線を施し、下端部に断面「コ」字形の低い突帯一条をめぐらす。横沈線上部に３～４条単位の波動の密な波状文を施す。内外面ともに横ナデで、胎土は密、焼成軟質である。瓵00028は、頸部から口縁屈折部を残す。口縁は外開度が大きい。内外面ともに暗赤褐色を呈し、還元焼成が良好に行われていない。口縁部は内面端部が窪み、跳ね上げ状となる。頸部との境には一条の低い三角突帯をめぐらす。内外面横ナデで、口縁部外面に一条、頸部外面も細かい波状文で埋める。胎土密、焼成は堅緻である。口径11.2cm。瓵00042は、口縁部のみである。立あがりが強く、形態は00306に類似する。頸部との境に断面コ字形の低い突帯一条をめぐらす。突帯上外面には単位５本程の細かい波状文を施し、この後に工具によるナデがみられる。内外面は、淡灰色～淡黄褐色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径13.4cmである。瓵00312は、00028と形態的に類似する。器色は全体に内外面ともに暗灰色を呈し、外面下部に黒灰色部分がある。器面調整は内外ともに横ナデで、外面上部に細かい一条の波状文を施し、下部も波状文で埋めつくす。波状文単位はほぼ４本である。胎土密で、焼成堅緻である。口径10.4cmをはかる。

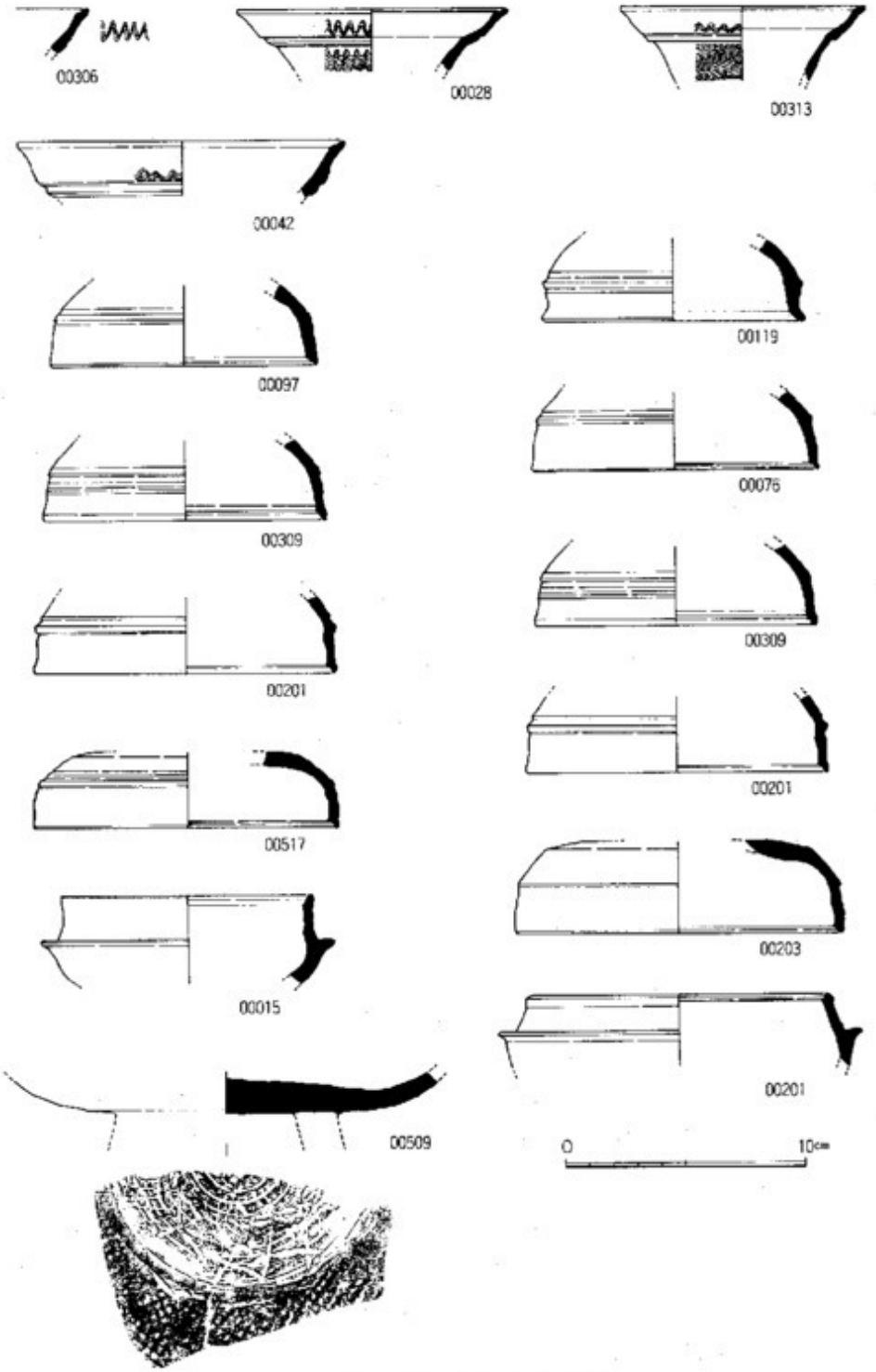



Fig. 17　窯址出土遺物実測図（1）(1/3)

b．**蓋杯**（Fig. 17、PL.13）

杯蓋（Fig. 17）　甕類についで多い器種は杯蓋である。絶対的には少量であるが、口縁部の形態から2～3類に区別できよう。

蓋　蓋00097は、天井部を欠くが、内外面ともに淡赤褐色を呈し、口縁部が直線的に外方にひろく特徴を有する。口縁部と天井部の境は低い、断面「コ」字形の突帯をめぐらす。口縁端部内面は沈線状に窪み、稜をなす。器面は内面横ナデ、外面積ナデ後に天井部の一部ナデ調整を施こす。胎土は密、焼成堅緻である。口径11cmをはかる。蓋00309は、内外面とも淡赤褐色を呈し、外面に黒斑が多い。外面の天井部と口縁部の境は断面「コ」字形の低い突帯をめぐらし、これ以下の口縁は押線状となり、突起も緩い段をなす。また端部はやや外方にひらき、内面はやや窪み稜がつく。胎土には若干の細砂を混入し、やや粗で、焼成は軟質である。口径11.8cmをはかる。蓋00201は、外面淡赤褐色、内面淡褐色を呈する。器面調整は内外面ともに横ナデである。口縁部と天井部との境はかなりしっかりした断面「コ」字形をした低い突帯一条がめぐり、口縁部はかなり高く全体に器形が丸味をもつ。胎土は密で、焼成はかなり堅緻である。口径12.6cmをはかる。蓋00517は、内面は淡黒色を呈し、外面に灰を被る。器形は天井部が低く、口縁部との境には上端面がまるい断面「コ」字形突帯をめぐらす。天井部は全て回転ヘラケズリを残す。口縁端部内面は、沈線状となり段をなす。胎土は密で、焼成堅緻である。口径12.5cmをはかる。蓋00119は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。天井部と口縁部との境は肥厚し、三角突帯をめぐらす。口縁端部は屈折して外方にひらく特徴を有する。残存部からでは天井部はかなり高くなろう。器面は内外面ともに横ナデを施す。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径12cmをはかる。蓋00076は、器色内外面ともに淡黄褐色を呈する。口縁部と天井部との境の突帯は低いがシャープである。全体に薄手づくりで、内外面ともに横ナデ調整を施す。口縁端部は薄く突出し、内面は明瞭な段をなす。胎土は密で、焼成は軟質である。口径11.8cmをはかる。蓋00207は、00309と同様に口縁部外面が多稜となる。また00203は、小形破片ながらこれまでのどの杯蓋よりも大きい。天井部は低く、上端部はヘラケズリを施し、平端面をなす。口縁部と天井部との境は低く、鋭い三角形の突起となり、天井平坦面に向って直線的に伸びる。口縁部はやや外方に開き、端部内面は窪み、稜をなす。器色内外面ともに淡赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成堅緻である。口径13.6cm、器高3.9cm（復元値）をはかる。

杯身　杯身は、口縁端部を欠損する資料や受部のみのものが多くあって図示可能なものが少ないが、焼成された製品の中では最も多いもののうちの一つである。以下の2点の資料は口縁部立あがりの内傾度や径の差異などから製品の特徴をよくあらわしていると考えられる。

杯身00015は、器色が内外面ともに淡褐色を呈する。受部はほぼ平坦面をなし、立あがりは直立気味である。口縁部内面端部は、前の蓋口縁部内端部と同様の特徴を有し、沈線状に窪む。胎土は密で、焼成軟質である。最終焼成面（上層）からの出土であり、焚口部破片とも接合した。

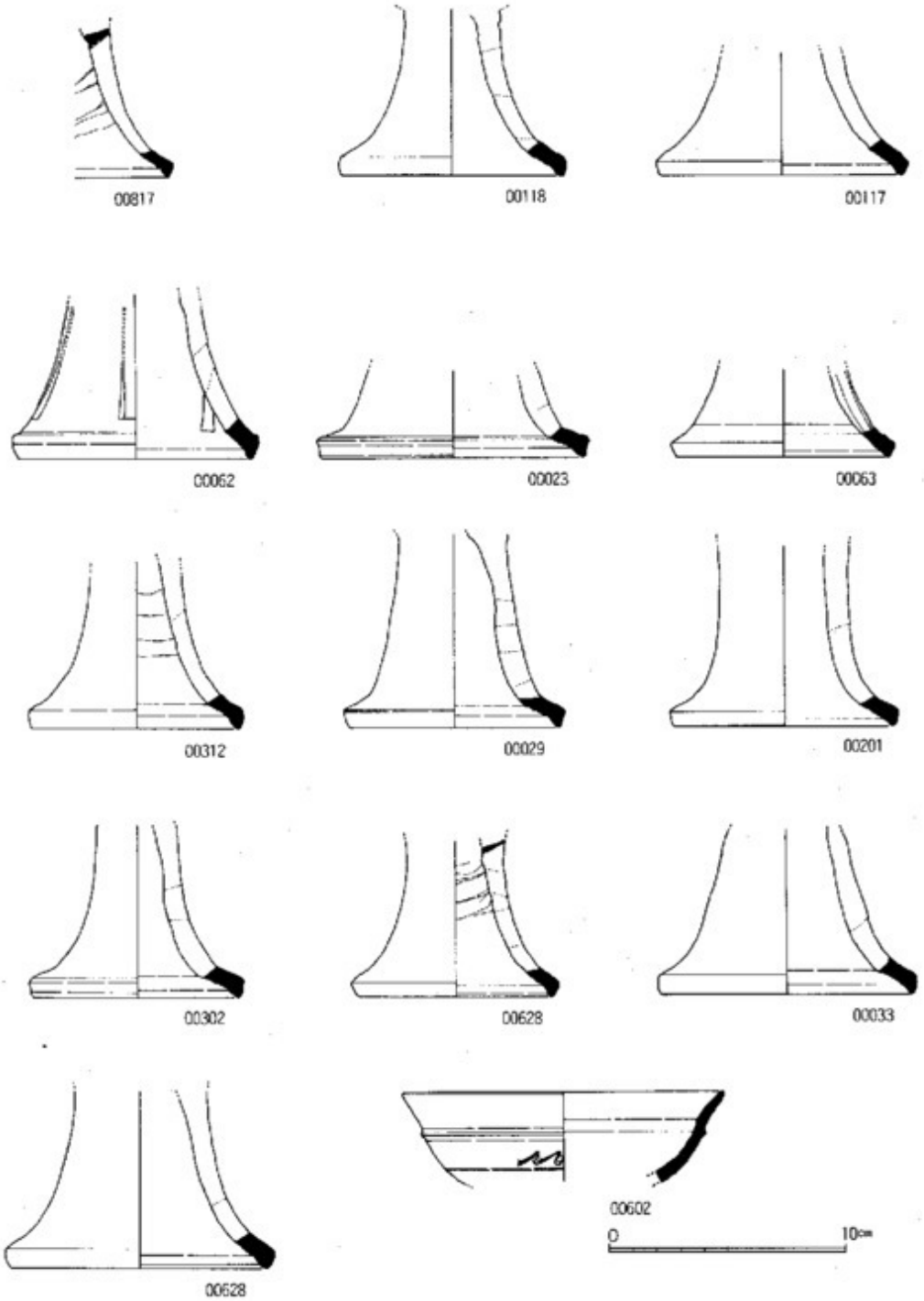



Fig. 18　窯址出土遺物実測図（２）（1/3）

口径10.4cmをはかる。杯身00201も最終焼成面(上層)からの出土である。00015に比較して受部がのびあがり、立あがりは長いが、内傾している。口縁部端部はやや肥厚し、内端部が沈線状に窪む。器色は内外面ともに淡褐色を呈し、器面調整は全て横ナデである。胎土は密で、焼成軟質である。口径12.4cmをはかる。この2点の資料は蓋とも法量的に対応すると考えられ、少くとも蓋杯には3類の組みあわせを考えることができよう。

c．**高杯**（Fig.18～19、PL.13～15）

高杯は、蓋を有する例はなく全て無蓋高杯である。焼成の良好なものは少量であり、殆んど半製品である。出土量は杯部に比較して脚が圧倒的に多く、一体をなすものは3個体にすぎない。出土位置は上層・下層の両面にあって、形態的にも大きな変化はみられない。

高杯00517は、脚部破片である。脚端部は小さく屈曲して、尖る。脚上端部に近い部分から長方形透し窓をいれる。内面にしぼり痕がみられる。器色は淡灰色を呈し、器壁はオリーブ色となる。器面は内外面ともに横ナデを施す。胎土は密で精良、焼成堅緻である。同00118は、やや小型で脚端部に近い部分で裾が開く特徴をもつ。内外面ともに暗い赤褐色を呈し、器面調整は横ナデである。透し窓は長方形四方と考えられ、下端部幅1.4cmをはかる。脚上部付根ぎりぎりまで透しは及ぶと思われる。胎土は細砂を若干混入、焼成は堅緻である。脚端部径9.4cmをはかる。同00117は、脚上部を失なうが裾部の良くひらいた薄手づくりの脚である。器色外面赤褐色、内面淡赤褐色を呈し、調整は何れも横ナデである。胎土に若干細砂を混入するが密で、焼成は堅緻である。脚端部径8.4cmをはかる。同00062は、脚端部が直立気味で、内外面端部に調整が顕著である。透し窓のうち脚上部は不詳であるが、長方形四方透しであることが確認できる。器色外面淡灰～淡赤褐色、内面淡赤紫色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。脚端部径9.2cmをはかる。同00023は、脚裾部が急激に外方にふんばる特徴をもつ。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈し、器面調整は横ナデ後内面端部を一部ナデている。胎土は密で、焼成堅緻である。脚端部径は11.2cmをはかる。同00063もまた裾部の良く開いた脚部破片である。器色は外面が暗赤紫色、内面淡黄褐色を呈する。器面調整は、横ナデ後脚端部外面をナデている。また透し窓は長方形に切り取った後、内外の長辺を面取りしている。胎土は密で焼成は堅緻である。全体に薄手のつくりである。脚端部径9cmをはかる。同00312は、脚径が4cmと小型のもので、脚端部付近は屈曲する特徴をもつが全体に薄手づくりで、器サイズも小型となろう。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈し、調整は横ナデ後外面に一部ナデを加える。脚内面には顕著なしぼり痕を残す。また脚端部内面は窪んで段をなしている。胎土は密で精良で、焼成堅緻である。脚端部径8.8cmをはかる。同00628は、00312と同様に小型の製品である。器色は外面淡赤灰色、内面淡灰色を呈する。器面調整は横ナデ後に外面一部にナデを施す。脚内面上部はしぼりを加える。胎土密で、焼成堅緻。脚端部径8.2cm。同00033は、外面淡赤褐色、内面淡黄褐色を呈する。全体に器面の磨滅が著しい。胎土密で、焼成軟質である。脚端

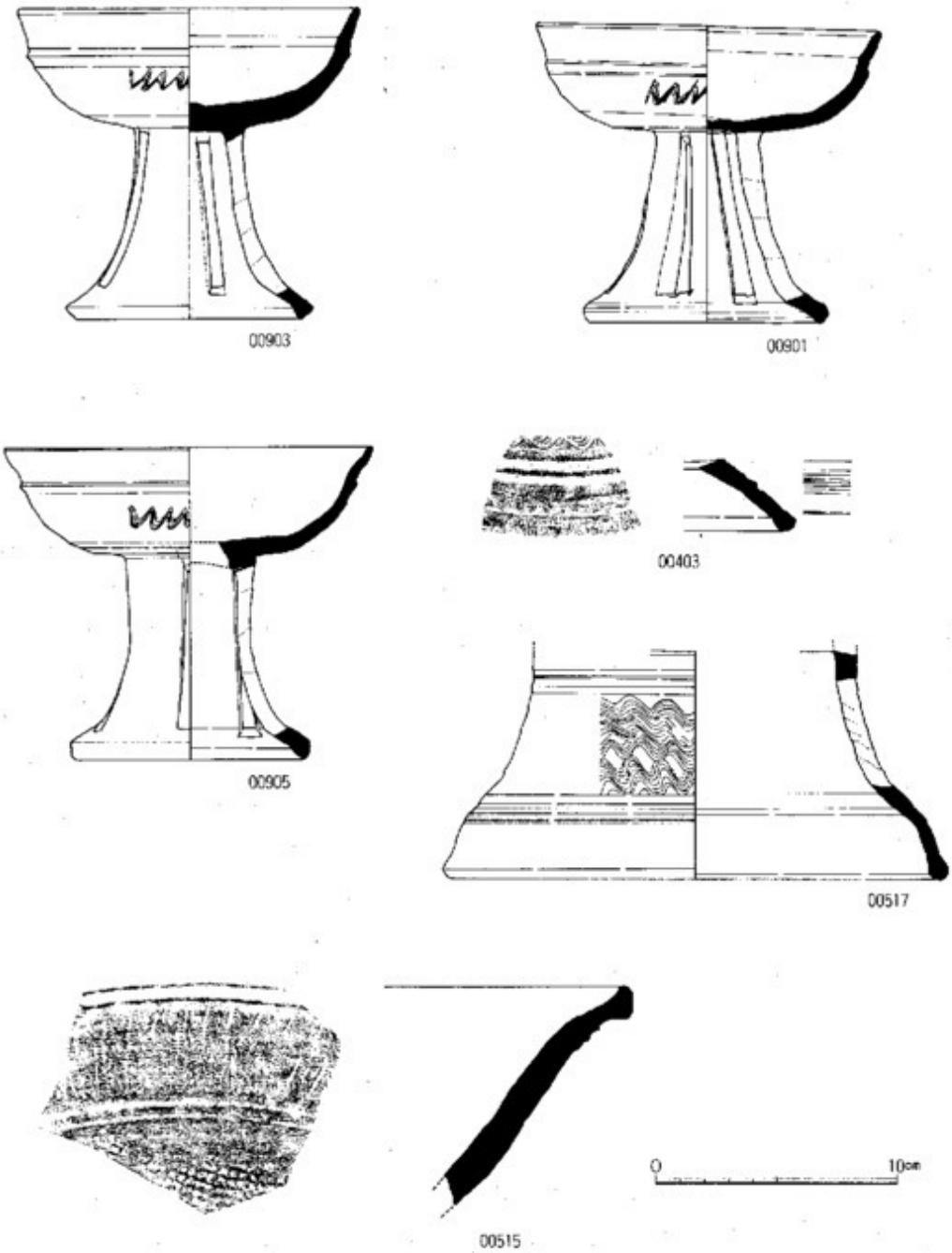



Fig. 19　窯址出土遺物実測図（3）(1/3)

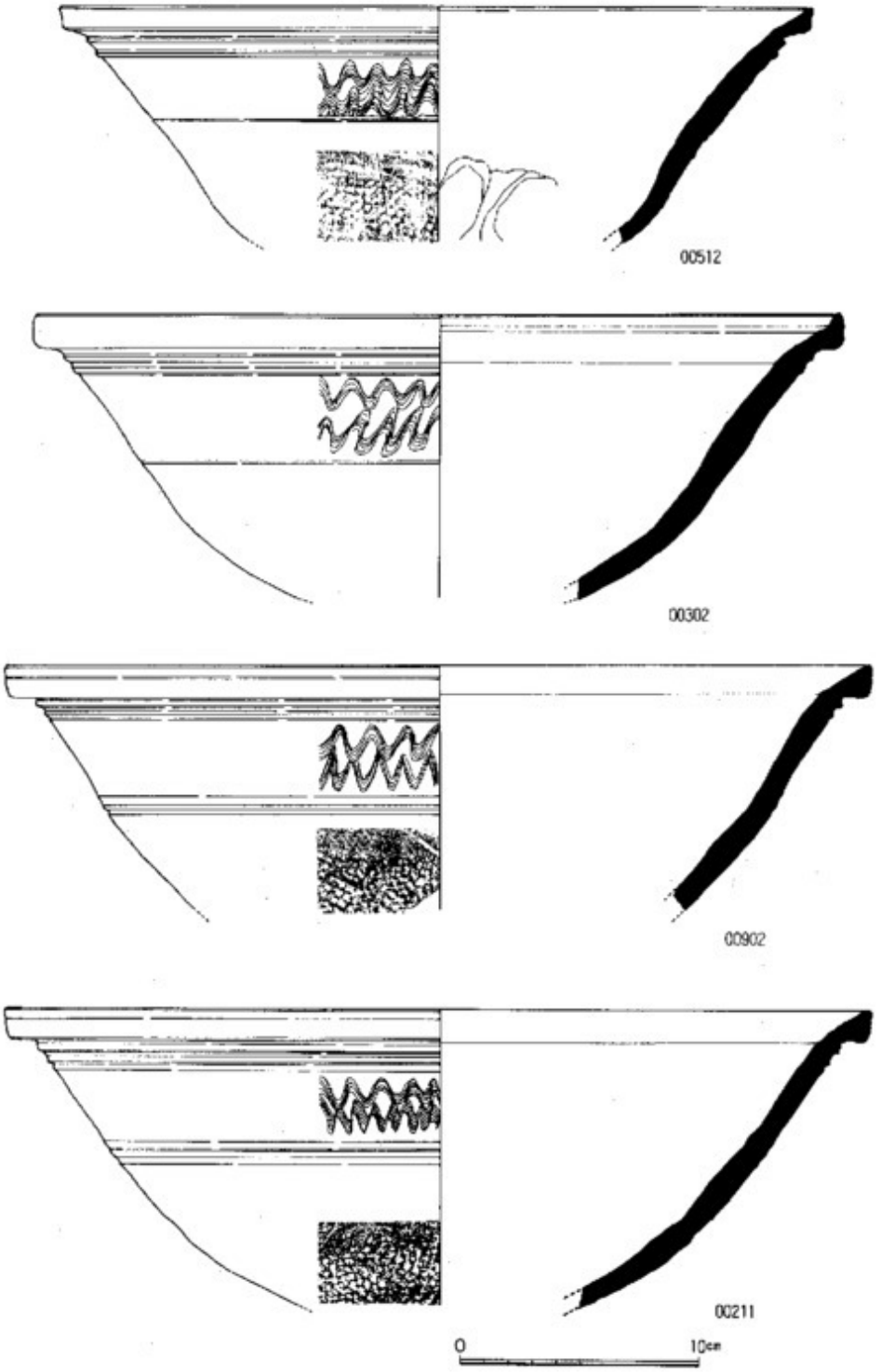



Fig. 20　窯址出土遺物実測図（4）(1/3)

部内面が大きく窪む。脚端部径10.8cm。同00629は、脚端部径が10.8cmと00033と同様に大型のものである。器色内外面ともに暗赤褐色を呈する。調整は横ナデ後外面の一部にナデを施す。胎土密。焼成堅緻。同00602は、杯部で緩く外方に開く口縁下に一条の突帯をめぐらす。突帯以下には細かい波状文一条を施す。器色は黒灰色を呈し、調整は横ナデ後内面にナデを加える。器壁は胴部でほぼ4mm程でよくしまっている。口径13.6cm。胎土やや粗、焼成堅緻。同00903は、ほぼ完器である。杯部口径14cm・同高4.1cm、脚長8cm、脚上端径4.8cm、脚端部径10.2cm、器高13cmをはかる。脚部に長方形四方透しを施す。口縁下突帯より5mm程下った位置に波動長がほぼ1cmで右下りの波状文をめぐらす。杯外底部にヘラケズリを残す。器色は暗赤紫色で、胎土やや粗、焼成堅緻である。同00901は、00903と同様の形態であり、口径14.2cm、杯高3.8cm、脚長8cm、脚上端部径4.4cm、脚端部径10cm、器高10.22～10.25cmをはかる。内外面の調整も殆んど同一である。同00905は、細部の差異を除けば殆ど前二者と同一である。口径15.2cm、杯高3.9cm、脚長8.5cm、脚上端部径5.4cm、脚端部径9.8cmをはかる。脚部の透し窓は長方形四方透しであり、脚付根のぎりぎりまで及ぶ。器色は外面で暗赤紫色、杯内面で淡灰～淡赤褐色を呈する。胎土に若干粗砂を混じるが密で、焼成堅緻である。これら3点の高杯完器は全て上層（最終焼成面）での出土であり、未焼成のまま放置された製品であろう。

d．**脚台**（Fig.19、PL.15）

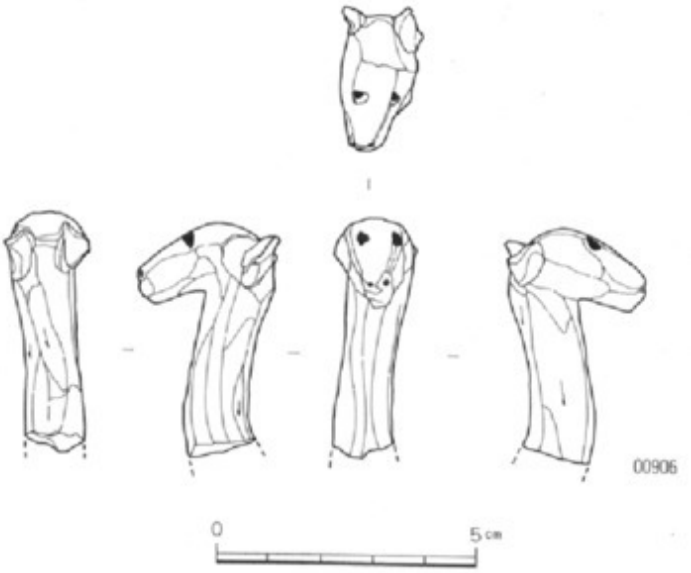
脚台は、00509（Fig.17）の様に剥落しているが明らかに甕底部に付属するものもあるが、00403、00517の様に本体より遊離したものもあり、器種を特定できないので一括した。

脚台00403は、表面採集資料である。脚端部近くの透し窓以下しか残さない。透し窓は三角形をなすものと考えられ、断面が鈍い三角形をなす突帯上部に緩い波状文を施した後、切り取られている。脚端部は玉縁状の断面をなし、鈍い面取りが観察される。器色は外面淡灰褐色、内面紫灰色を呈し、脚端部は火のまわりが悪いために淡黄灰色となる。胎土は密で、焼成は堅緻である。同00517は、灰原出土の資料である。円筒部から裾部に従ってふんばるように開く脚端部は00403と同様に断面形が玉縁状で丸く仕上げられている。脚端部からやや上った位置と円筒部に移行する位置に低い突線状の段を施し、この間に幅1.8～1.9cm程の施文具によって荒い波状文をめぐらす。この後三角形透し窓をおき、更上段部には千鳥式に三角形透し窓を配置するとおもわれる。端部は淡黄色、内面淡灰色を呈する。尚、櫛歯状工具単位は8本である。底径5.5cmをはかる。

e．**器台**（Fig.19・20、PL.14）

器台は、00512（Fig.20）を除き全て還元時の焼成が不十分な未製品である。完器は無く、図示した5点の杯部以外でも出土したのは杯部のみである。

器台00515は、器色内外面ともに暗赤褐色を呈する杯部破片である。未製品であるため全体に焼けしまりがよわく、肉厚である。口縁は肥厚して、外端部がやや垂れ気味で、内面は窪み



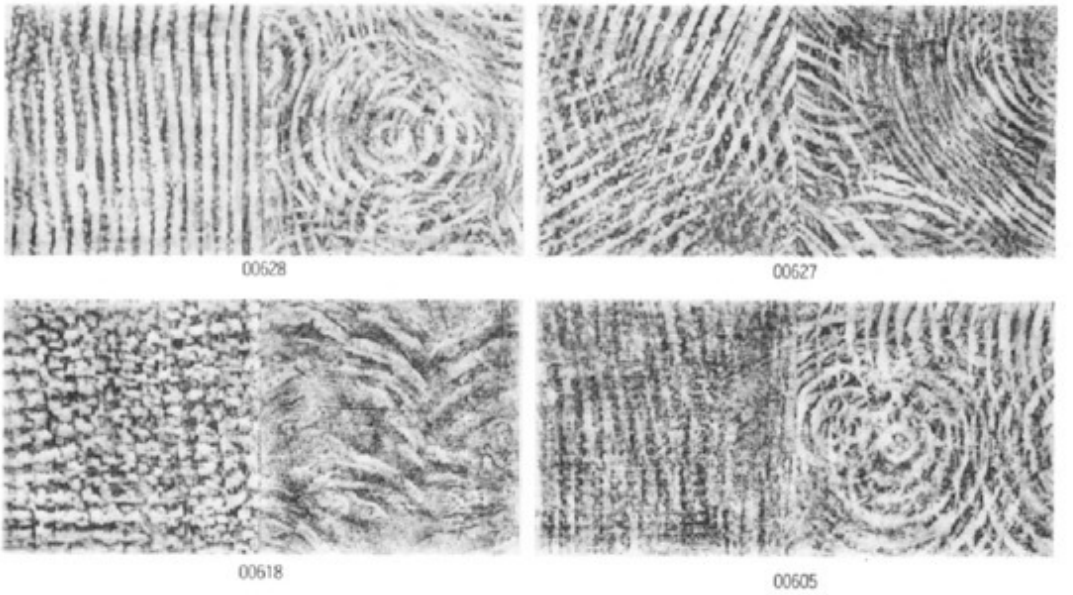




Fig. 21　窯址出土遺物実測図・拓影（5）（2/3・実寸）

跳ねあげ状となる。端部は丸く、鈍い。口縁直下に２条の低い三角突帯をめぐらし、底部との境付近に鈍い２条の沈線に囲まれた低い「コ」字形突帯を施す。この間には横ナデ後に、端部幅1.7㎝程の工具によって２条の波状文を上下に重複して施文する。また外底部には一部格子叩きを残し、内底部は痕跡的にあて具痕（青海波文）が認められこれ以上は強い横ナデとなっている。胎土は密であるが、若干の細砂を混し、焼成は軟質である。同00512も坏部のみの破片であるが、良く焼けしまっている。器色は、内外面ともに暗灰色を呈し、全体にめり張りの利いた製品である。口縁端部はやや屈折気味に外方に開き、直下に頂部の丸い２条の三角突帯をめぐらす。体部の中位には１条の沈線を施し、他の例にみられる様に突帯を意識したものであろうか。器面調整は、内外面ともに横ナデである。外底部には格子叩きを残し、内底部は横ナデ後に指おさえ、ナデがみられる。また口縁下と体部中位の沈線文によって囲まれる位置に波長が1.5㎜程の波状文を上下に２条施文する。胎土には若干の細砂を混入するが密で、焼成もまた堅緻である。杯部の内底部までの高さは、ほぼ10㎝を前後するものと考えられ、口径は復原値で31.14㎝をはかることができた。同00302は、器色内外面ともに暗赤褐色を呈し、口縁端部内面が跳ね上げ状となり直立する。口縁部直下には端部の丸い２条の三角突帯をめぐらす。また体部中位に１条の沈線を施し、これと口縁下突帯との間に不整な波状文を上下に２条施文している。器面調整は外面が磨滅のため上半部が良く判らないが、下半部の沈線以下では格子叩きを残す。また内面はほぼ横ナデで、一部底部にあて具痕（青海波文）がみられる。未製品のため焼けしまりが不良で全体に未だ肉厚である。胎土は密で、焼成は軟質である。坏部の内底までの高さはほぼ12㎝を前後するものと考えられ、口径33.6㎝をはかる。

同00902は、他の半製品と比較するとやや焼けしまりの良い製品である。器色は内外面ともに暗赤紫色を呈する。口縁部は端部がやや肥厚し、直下に頂部の平坦な２条の突帯をめぐらす。突帯は上部のものが高く、下部のものは低く断面「コ」字形となる。体部中位には２条の沈線に囲まれた低い突帯が施される。器面調整は、内外面ともに横ナデで、外底部に格子叩きが残る。口縁下突帯と体部突帯に囲まれる位置に波長がほぼ１㎝ほどの波状文が上下に２条施文される。波状文は上下の谷部と頂部が交叉し、下方のものを先に施文し、この後に上方を行っている。胎土は密で、石英粗砂を若干混入する。焼成は非常に堅緻である。杯部の内底までの高さは比較的高く、深い杯部となろう。口径は36㎝をはかることができる。

同00211は、器色が内外面ともに暗赤紫色を呈し、他に比較して焼けしまりが良好な製品である。口縁端部は肥厚し、直下に２条の低い三角突帯をめぐらす。また体部中位よりやや上った位置に低い突帯１条を施す。器面調整は、内外面ともに横ナデであるが、外面の体部突帯下は特に丁寧な横ナデが加えられる。また外底部には格子叩きが痕跡的に残る。口縁下突帯と胴部突帯に囲まれる位置に上下２条の波状文を施文する。施文は下方のものが先に、上方の文様を後に行う様にみえるが、下方のものが殆ど左右への動きのみが認められ、上下の振幅が少な

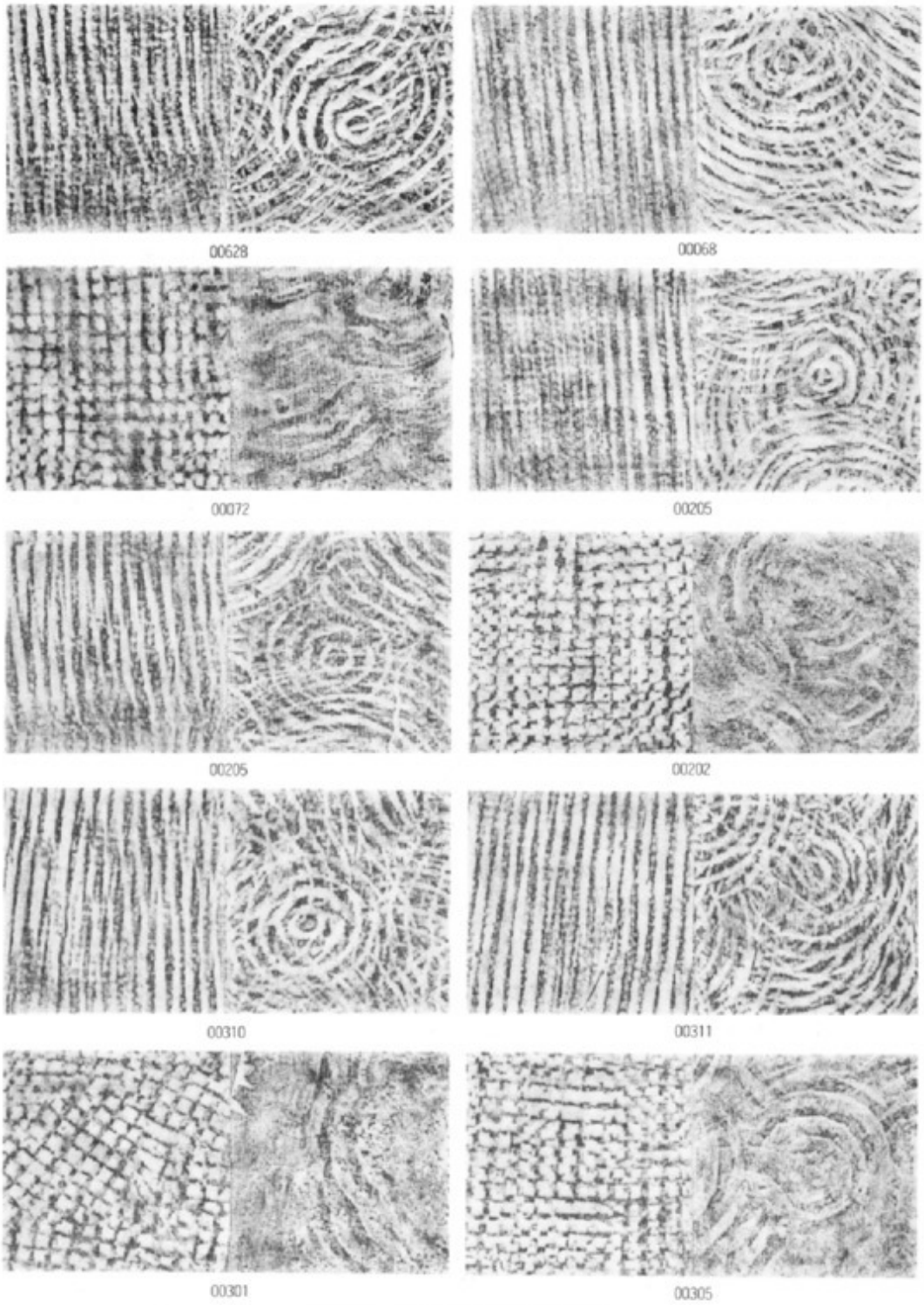



Fig. 22　席址出土遺物拓影（実寸）

いことから上下とも同時に施文された可能性もある。胎土は密で、石英粗砂を多く混入する。焼成は非常に堅緻である。杯部の内底までの高さは12.5cm程度と考えられ、比較的深い杯部である。なお、口径は36cmをはかることができた。

f．甕（Fig.17・21・22、PL.15）

甕類は前記の様に口縁部など器の特徴を残すものが殆ど無く、計測に耐え得るものが少なかったため胴部破片類の拓影を示した。尚、小破片ではあるが甕口縁と考えられるものが1点出土している。これは上端が薄く、下端に従って肥厚する謂はば扁平な玉縁状の断面形をなす。甕類は破片ながら上・下層ともに出土しており、出土量に両者の差はあるものの器面調整の差異からいえば外面叩きが下層（第1次焼成面）で平行叩きが多いのに比べて上層は格子叩きの割合が高い傾向にある。以下個別について述べる。

甕00509は、外底部端よりやや中央よりに脚台の外れたあとが残り、脚台付甕であることが判る。器色は内外面ともに淡灰色を呈し、外面体部・底部に格子叩きを残す。また外底部中央に同心円状のあて具痕がみられる。内面はナデである。胎土は精良で、焼成もまた堅緻である。底部は径12cm程の平底となろう。灰原出土。

甕拓影（Fig.21・22）のうち00628・00627・00618・00605は下層（第1次焼成面）出土のものである。外面叩きは平行のものが多く、一部に格子目を混じると考えられる。内面のあて具痕の明るかなものもあり、現状で直径が5～6cmをはかる同心円状となっている。内面は完全にではないが、あて具痕（青海波文）をナデによって消し去っている部分もみられる。

また00068・00072・00205・00202は、上層（最終焼成面）出土のものである。外面叩きは平行のものより格子目が多く、内面もあて具痕（青海波文）をナデ消す場合が外面格子叩きのものに多くみられる。

次に00310・00311・00301・00305は、燃焼部および焚口付近出土のものであるが、ここでも格子叩きのものは内面のナデによるあて具痕消しが顕著である。

g．陶製馬（Fig.21）

00906は、器種は不明であるが把手あるいは器に付設される装飾品と考えられる。頸部の付根と考えられる部分以下を欠失する。残存長4.5cmで、耳、目、鼻孔および後頭部にたてがみと考えられる表現がみられる。顔は直立して、物憂げに前方を望んでいる様で、刺突による目・鼻の表現も素朴である。器色は灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。首部はタテのヘラ削りにより多面的に仕あげる。

(2) 土壙（Fig.23）

ＳＫ01土壙は、窯址より北へ15m程の同一斜面上に検出された。検出面は表土下の黄褐色粘質土除去後である。遺構は東側を後世の削平のため失うが、東西1m、南北1.3mをはかる不

整な長方形を呈する。壁面は本来は直立気味であったと考えられるが、北側では２段以上の平坦部を有するいびつなものとなっている。土壙の西側と土壙床面には各々径が、40cm、30cm程の円形竪穴が２個検出された。土壙の壁面は、立あがり部および底面が火に遭って若干赤変している外は際立った燃焼のあとはみられない。また土壙内埋土は褐色土に炭あるいは焼土塊を混じるもので、埋没時には転礫の流入が多くみられる。壁面は北側でほぼ60cm程の高さをはかる。埋土内には焼成の悪い甕胴部破片が出土し、窯址の操業に関連することは考えられてよかろう。尚、本土壙は東側で隣接するＳＣ01住居址とも同時性を有すると考えられる。

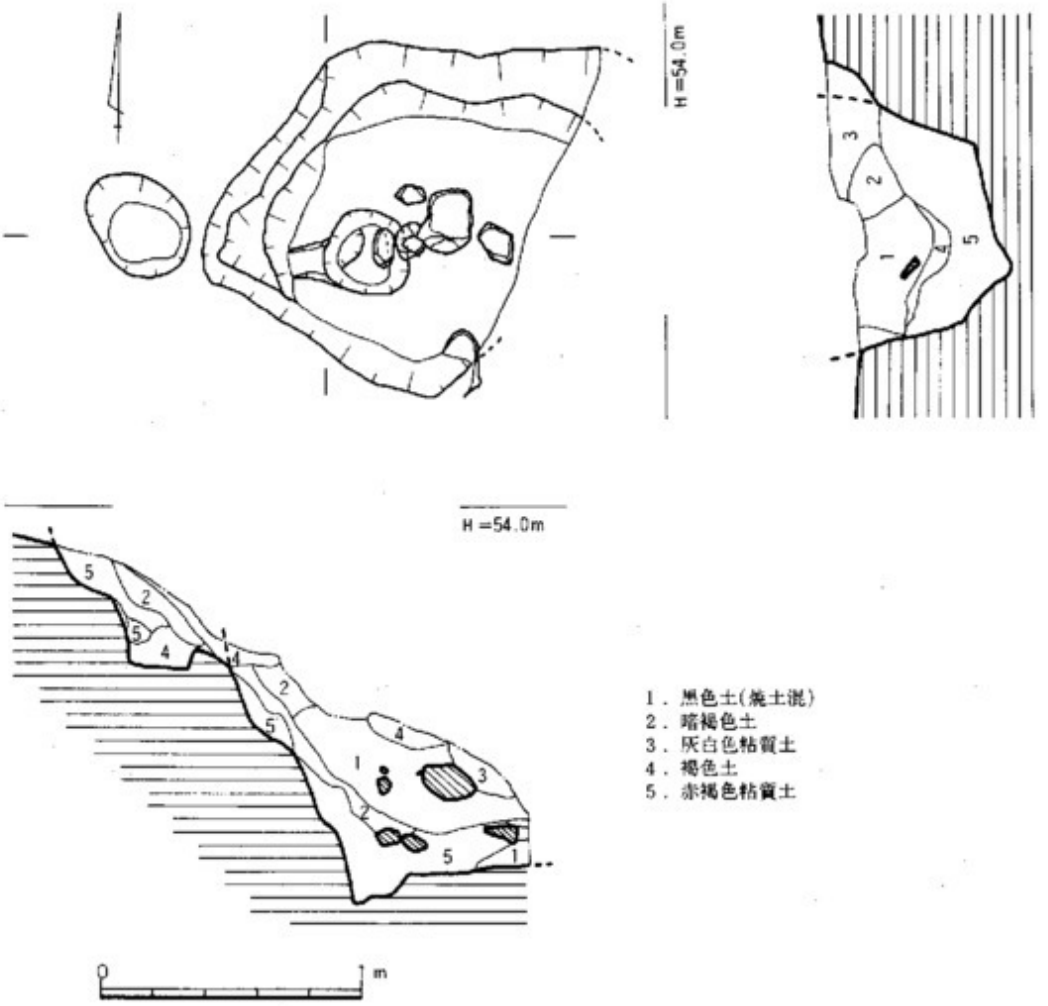



Fig. 23　SKOI土壙出土状況（1/30）

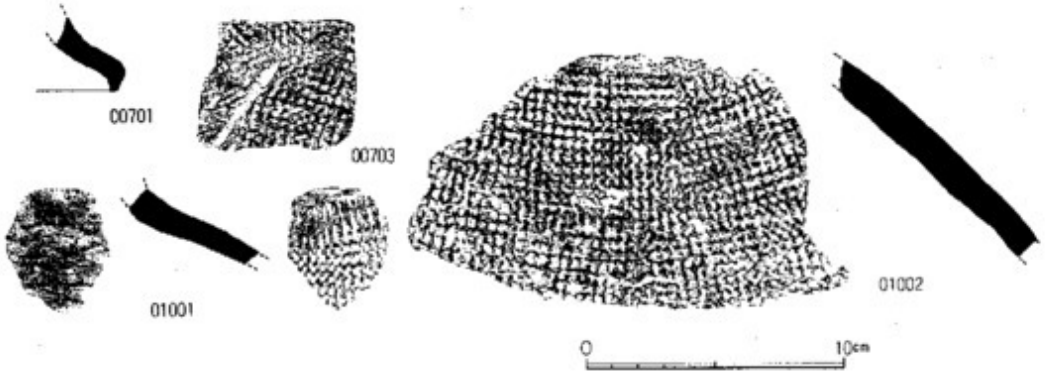



Fig. 24　SK01土壙出土遺物実測図（1/3）

**出土遺物**（Fig.24）　出土遺物のうち00701は、高杯脚部の裾部破片である。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。器面調整は外面がカキ目状の横ナデで、下端部は縦方向にナデた後横ナデである。内面は横ナデである。胎土は密で、焼成堅緻である。窯址出土の高杯脚部と同一の特徴をもつ。

00703は、外面に格子叩きを残す甕胴部破片で、軟質のため器面の荒れが著しい。器色は暗赤褐色を呈する。

01001は、甕頸部破片である。土壙底部直上で出土した。器色は外面淡灰色で、内面黒灰色を呈する。器面調整は、外面で格子叩き後に頸部下端を強い横ナデを行ない、内面はあて具痕を一部ナデによってすり消している。胎土は非常に密で、焼成もまた堅緻である。

01002は、焼成不良の未製品甕胴部破片である。外面は細かい格子叩きを施す。内外面ともに赤褐色を呈する。胎土は密であるが、焼成軟質で、器面の剝落・荒れがいちじるしい。

### (3)　住居址（Fig.25、PL.10）

ＳＣ01住居址は、窯址の北方15m程の同一斜面に位置し、ＳＫ01土壙と近接して検出された。同住居址は、傾斜面を段状に掘削して平坦面をなし、床面を造成したと考えられる。プランは、遺存が悪く、西壁と南・北壁の一部を残すのみであるが、西壁でほぼ３ｍをはかり、東西では主柱穴を基準とすると 3.7ｍ以上と考えることが可能である。従ってプランは東西に長い長方形となろう。また壁面は西壁で30cm、南壁で60cm程の壁高の残存が認められ、西壁から北壁の北西側にかけては掘り方時のものと考えられる段が残る。

床面は、掘削時の地区面（花崗岩バイラン土）を残す西半部のみが遺存し、切土を盛り床面を造成したと考えられる東半部は主柱穴掘方を残すのみで流失している。床面より壁面上端までの埋土は、地山土である黄～赤褐色粘質土に若干の炭粒を混じるものであった。また、床面におかれた主柱穴は４本である。柱間は東西で２ｍ、南北で１ｍをはかる。柱掘方の規模は、

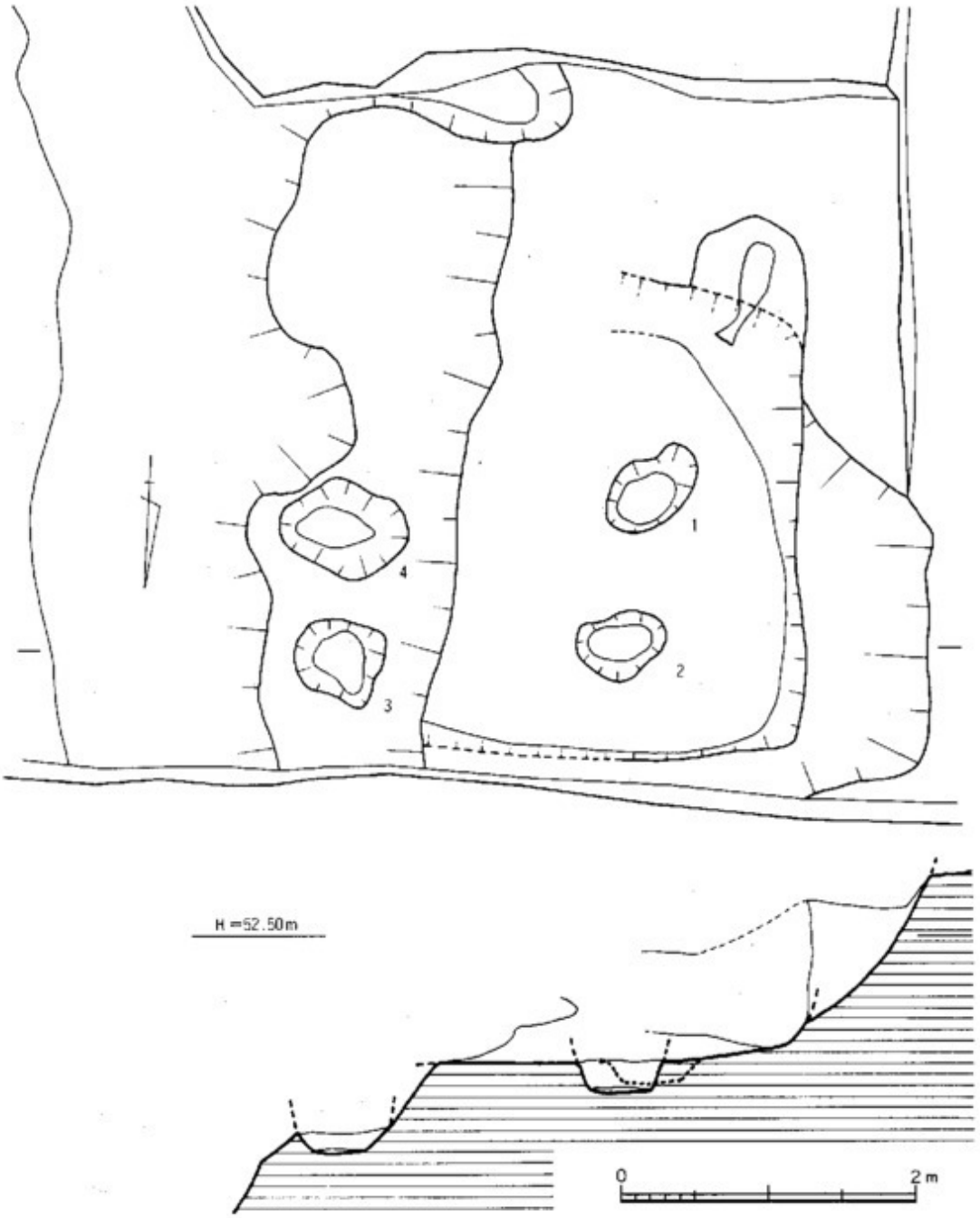



Fig. 25　SC01住居址出土状況図（1/50）

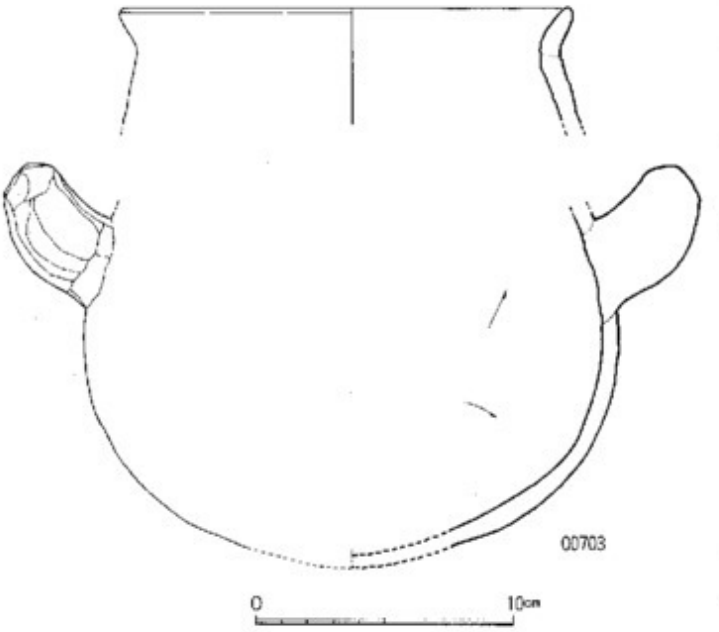



Fig. 26　SC01住居址付近出土遺物実測図

南側のものから時計回りに記すと、長・短辺長、深さが以下の通りである。1－0.7×0.55×0.16m、2－0.6×0.4×0.2m、3－0.9×0.6×0.45m、4－0.6×0.5×0.44mとなる。このうち西側2個のものは埋土（花崗岩バイラン土）に炭化物を多く含んでいた。

ところで本住居址に直接伴う遺物は無かったが、住居址南壁近くの斜面に土師器甑1個体が出土した。

**出土遺物**（Fig.26）　出土した土師器甑は1個体であるが口縁部と胴部の接点がなかった。全体に器壁は薄く、「く」字形に屈曲する口縁部と下方に膨らむ胴部を有する。器色は、内外面ともに淡い褐色を呈し、外面の把手以下は煤が付着する。器面調整は、外面がヘラ状のものでナデ調整、内面口縁付近も同様にヘラナデで、下半はヘラ削りを顕著に残す。口径17cm程度と考えられる。

## 3　縄文時代包含層の調査（Fig.27、PL.10）

本調査中にC－2号墳周辺や窯体内埋土中から磨製石斧・黒曜石剝片などの遺物の発見があったため窯址南側斜面に調査区を設定し縄文時代生活址の検出につとめた。その結果調査区は地山面（赤褐色礫混り粘土）が、南西部から北東部に傾斜しており、南半部を中心に径20～30cm、深さ40cm程の柱穴6個および長・幅が2.3×1.2m程の溝状遺構を検出した。埋土は何れも黄褐色土に炭化物を混じる。地山面は南端部標高61.3m程で北東部との比高は2.7m以上である。尚、調査では北側地山面よりやや浮いて土器片が若干出土した。

**出土遺物**（Fig.28）　調査区北側で出土した土器は少くとも2個体以上の土器破片であり、口縁部などは一切含まれない。

00811は、外面に横位のヘラによるナデ調整を残す深鉢胴部破片である。外面赤褐色、内面淡黄褐色を呈し、焼成は軟質である。

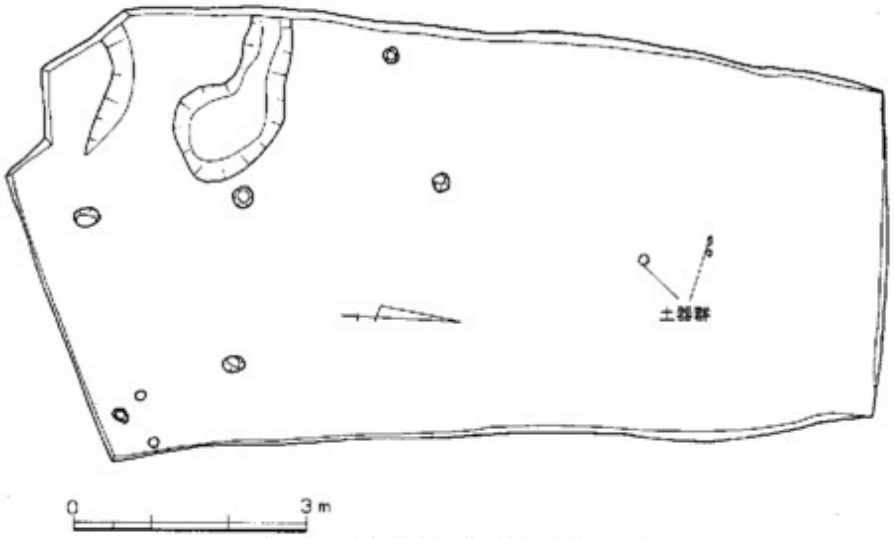



Fig. 27　縄文時代調査区全体図（1/100）

00801は、外面に横位の条痕文を残す深鉢である。器面は、内外面とも暗赤褐色を呈する。胎土には粗砂を多量に混入し、焼成は軟質である。

02006は、磨製石斧である。折損によって頭部を欠くが、刃部は薄い蛤刃であり、身部の厚さも小さいものである。頭部は尖頭形となるか。玄武岩製。C－2号墳表土層出土。

また00551石鏃は窯体内埋土内出土の凹基無茎式石鏃である。両面加工で腸抉りがそれほど深くない。長さ2.7 cm、幅1.8 cm、厚さ0.4 cmをはかる。黒色黒曜石製。

以上、調査では検出された柱穴および溝遺構の時期決定について有効な資料は得られなかったが、少くとも出土々器類は縄文時代後期に相当する時期の所産と考えられ、本遺跡を含む地域の資料的追加が望まれる。

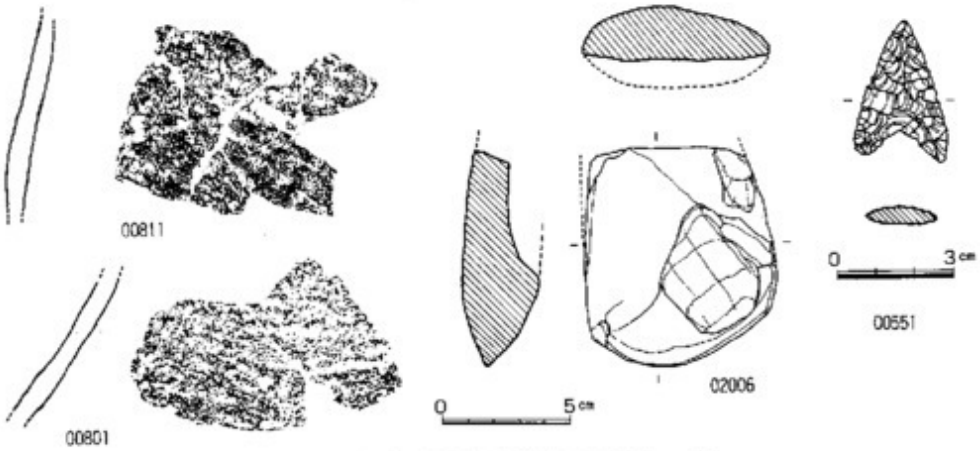



Fig. 28　調査区包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

# Ⅳ まとめ

以上述べて来た様に今回重留遺跡調査では重留古墳群C－2号墳および須恵器窯址1基とこれに関連する遺構が調査されたが、以下では須恵器窯址を中心として若干の考察を加えたい。

我国における須恵器生産開始の時期と様相については、これまでの和泉陶邑窯を中心とする製品の一元的生産、配布の立場に加え、最近甘木市池ノ上、古寺墳墓群より出土した多量の陶質土器・初期須恵器や同墳墓群に近い朝倉郡夜須町小隈窯址産出の製品類に型式および理化学的分析が加えられ、更に製品が搬出された周辺地域の様相が明らかにされつつある現在、生産開始にかかわる工人集団の系譜、これを支持する政治勢力もまた多元的であると考えられないであろうか。

ところで今回見付かった重留窯址を含む福岡平野では、いくつかの窯址が確認されているが、これまで正式調査例はなく、僅に西区新貝窯址群が1970年に、日本考古学協会生産技術特別委員会窯業史部会によって調査された。新貝窯址は2基が確認され、報告書は未刊ながら、型式的分類では定型的須恵器の生産段階であるⅠB期（陶邑Ⅰ型式4段階）を中心とする時期のものと考えられている。

また窯址出土資料の少ない中で重留窯址の北西2.5kmに対峙する吉武遺跡群（Fig.1．24）では、古墳時代掘立柱建物に付属する竪穴遺構や竪穴住居址、溝内から多くの陶質土器、初期須恵器が出土したが、これらのうちのいくつかは奈良教育大学三辻利一先生による胎土分析に付した。資料は無作為による抽出結果であるが、大阪陶邑、朝倉郡小隈、佐賀市神護池それに朝鮮半島等の各窯の製品と同定されている。しかし他にも地の不明な製品が多くあって、未だ知られていない窯が複数に存在する可能性を示唆している。

重留窯の製品は、灰原および窯体から出土した土器量構成の不足から定型的製品とくみあわせを十分明らかにはできないが、単数の窯である点や窯体の検出状況、須恵器型式の幅がそれほど認められない点で、操業は比較的短期間でしかもその流通は、早良平野とこの周辺部に限られたものではなかったかと考えられる。製品の胎土分析では、本窯址のものは前記の新貝窯址と非常に似た構成が観察されるとのことである。

さて以下では不十分な条件乍ら本窯の製品で定型的なものを器形の特徴・調整技法などから考えて行くこととする。

まず蓋杯では、杯身が少量乍ら大・小の2類に区別される。第1類は、受部がほぼ水平で、立がりが垂直に近く、口縁内面端部が緩く段状をなすタイプで口径10.6cm程度のもの、第2類はやや大口径のもの（12.8cm）で、受部が短く、斜めに伸び、立あがりは内傾して口縁内面端部が沈線状に窪む。また身に対応する蓋類は口径ではほぼ同数類が区別できる。杯身1類に対

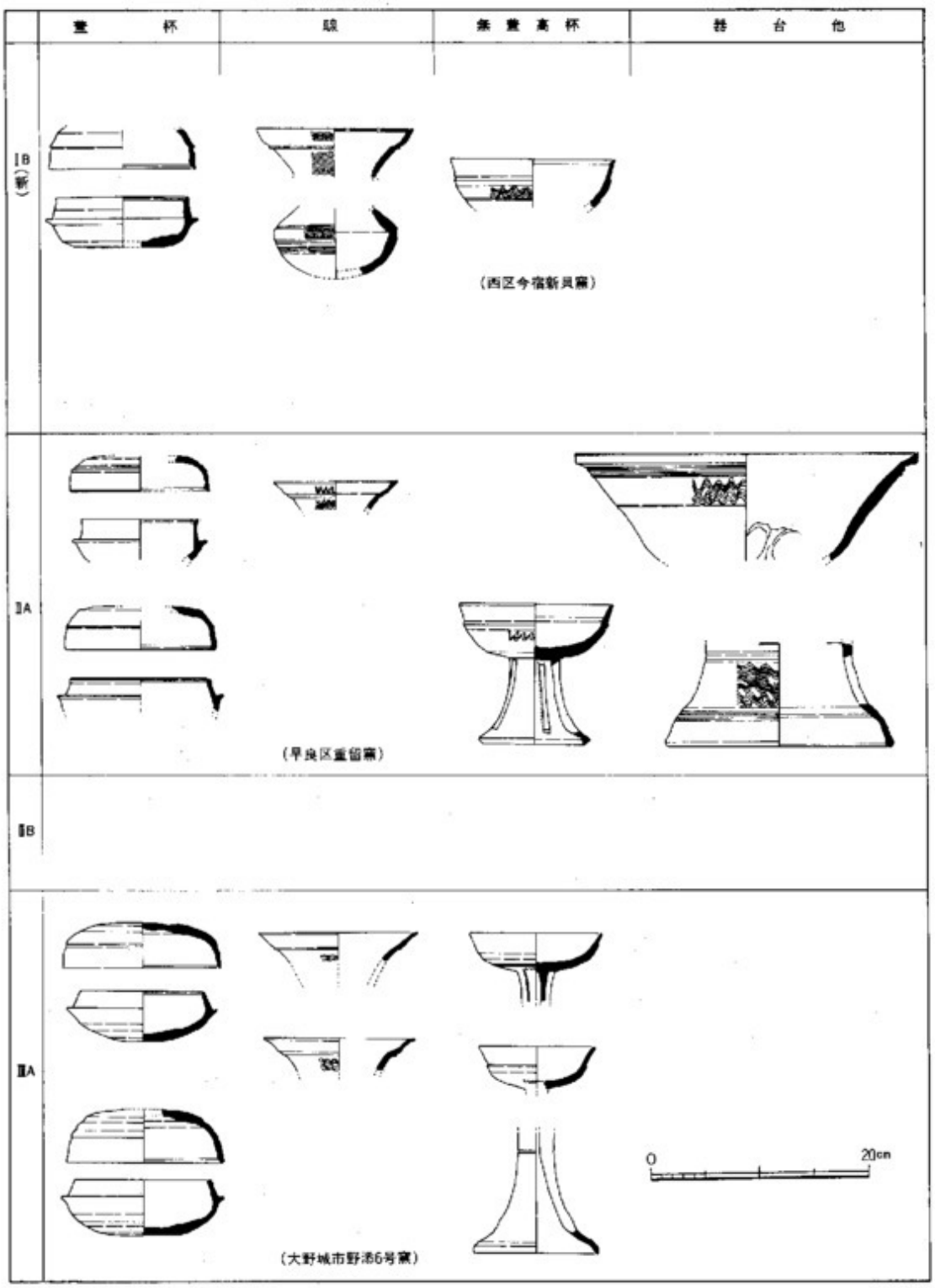



Fig. 29　重留窯址の編年的位置図（1/6）

応する蓋類(第1類)は、何れも天井部と口縁部との境をなす突起が断面「コ」字形をなし、口縁端部内面が緩く段状をなして窪む特徴を有するが、この中には量的には少いが口縁部が屈曲して外側にふんばるものや突起以下の外面がカキ目状に調整されたものもみられる。杯身2類の蓋と考えられる蓋(第2類)は、口径13.7cm程度で口縁・天井部との境は比較的鋭い突起となり、天井部のヘラ削りは小さい。また口縁部はほぼ垂直に立つが、端部内面の段は1類に比べて更に緩い。

次に鍔は、完器がなく頸部以上の破片類であるが、口径で10cm・12cm代の2種類が区別される。器形は口縁の開きに若干差はあるものの口縁部の外方への傾斜は強く、口縁と頸部との境に鈍い断面「コ」字形突帯をめぐらし、口縁端部内面は緩くくぼむ。口縁下端に1条の細い波状文を施し、頸部は同様の波状文で埋め尽すものである。

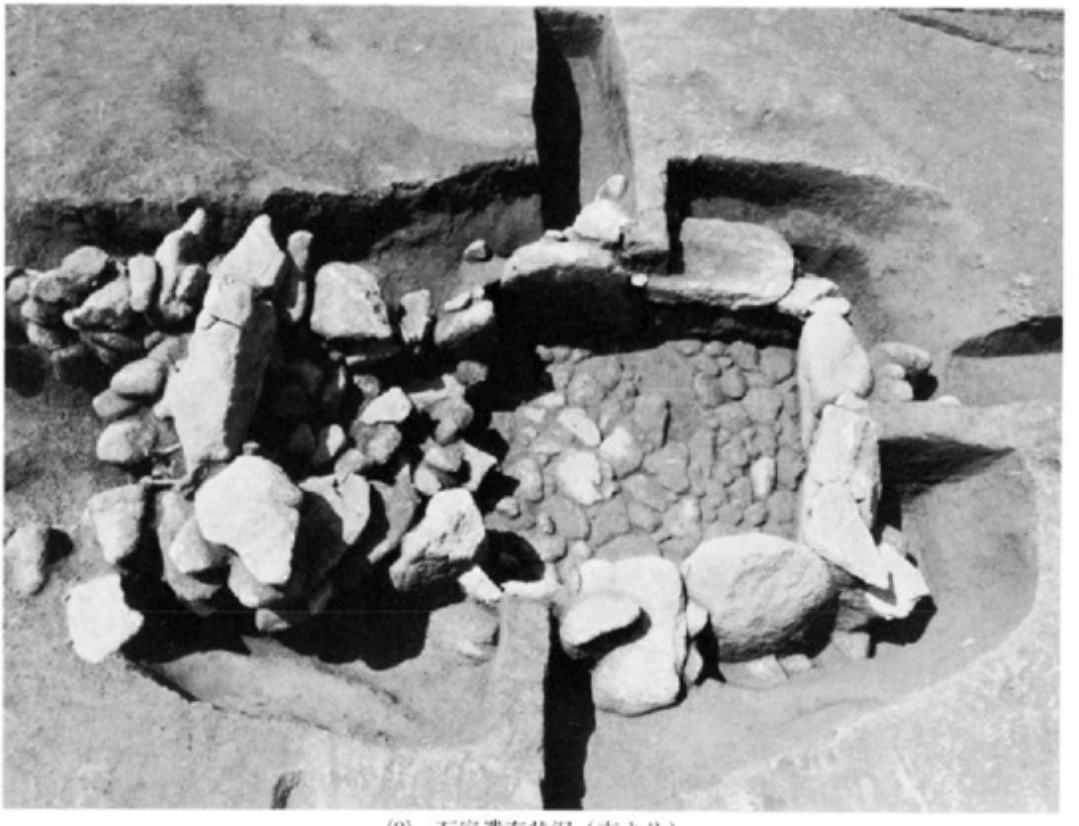
次に高杯は完器が上層(最終焼成面)で3個体程あるが、一応ここでは下層（第1次焼成面）との区別で類別する。通常の様に高杯は杯部と脚部との接合が少ない。第1類（下層出土）は杯部が口径13.7cm程度を測り、体部との境に鋭く、低い三角突帯1条をめぐらす。突帯下には細い1条の波状文を施す。口縁は突帯部で屈曲して外方に開く。全体に薄手づくりである。また脚は何れも長方形四方透し窓を有すると考えられ、出土例では大小2類が区別される。各々脚部長6.7cm、底径8.2cm、脚部長7.5cm以上、底径10.8cmである。脚端部は小形のものが端正で鋭く、何れも端部は尖る。第2類（上層出土）は、完器では杯部口径14～15cm、器高12.4～13cm、杯内底までの高さ4cm、脚部長8cm前後、脚端部径9.4cm程を測るサイズで、何れも脚部透し窓は脚付根から切り放った四方の長方形透しである。透し窓外面下端幅はほぼ1cm程である。また脚部のみ遺存の資料類にも大・小2種の区別が可能で、脚端部外面上部が稜をなすものと鈍く、玉縁状をなすものを混じる。高杯は内外面ともに横ナデによる調整がみられるが、杯部外底部付近には回転ヘラ削りを残す。

また器台は脚部が不明である。焼成の不完全なものが多い。杯部は鉢形をなし、口縁端部が肥厚する。口縁下に2条の低い三角突帯をめぐらし、胴部中位の1条突帯との間を2条の波状文で埋める。外底部には格子叩きを残し、内底部は粗雑なあて具痕を残す。口縁部形態から端部内面がやや立あがるもの（第1類）と直線的に外方に伸びるもの（第2類）とが区別できる。焼成の十分な製品（第1類）では杯部口径31.7cm、内底部までの高さ（推定）11.8cm程をはかる。他に胴部破片の多い甕類については実像を把え得ない。また脚台で二段の三角形透し窓を千鳥式に配し、端部が丸味をもつ特徴があり特記されよう。

重留窯址での製品の実態は以上の様に資料の量と器種組成が不十分であり、流通の範囲についての調査はこれからである。製品は高杯の脚部の長脚化、蓋杯の杯身が古式の特徴を残すものの杯蓋の天井部削りの減少、突起の鈍化などが特徴的で編年的には九州須恵器編年のⅡA期に相当するものと考えられる（Fig. 29)。

# 図　　版
# PLATES

(1) 重留C－2号墳調査前全景（東より）



(2) 石室遺存状況（南より）

(1) 墳丘遺存状況（東より）

(2) 石室遺存状況（東より）

(3) 石室遺存状況近影（東より）

(4) 石室遺存状況（羨道より望む）

(1) 墳丘および供献土器出土状況（東より）

(2) 墳丘および供献土器出土状況（南より）

(1) 窯址遠景（調査前・東より）

(2) 窯址遠景（調査中・東より）

(1) 窯址全景（東より）

(2) 窯址全景近影（東より）

(1) 窯体内土層断面（E－E′ライン）

(2) 窯体内土層断面（D－D′ライン）

(1) 燃焼部須恵器出土状況（北より）

(2) 燃焼部須恵器出土状況（東より）

(1) 窯体内須恵器出土状況（最終焼成面・煙道部より）

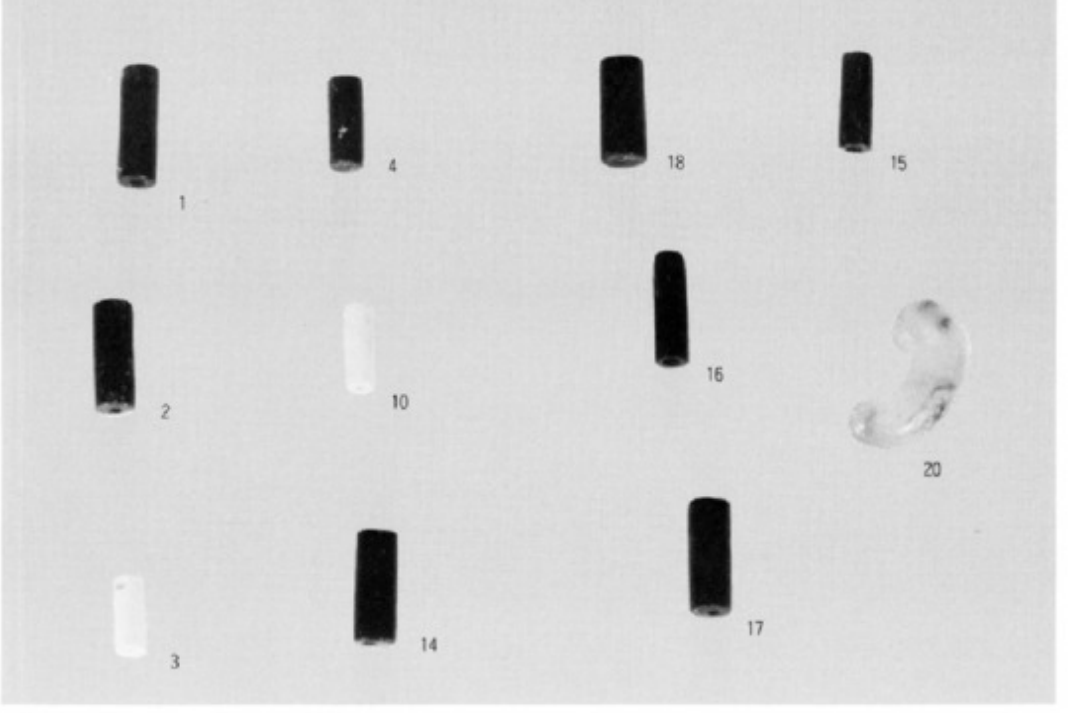
(2) 窯体北壁補強状況（南より）

窯体床面確認状況（東より）

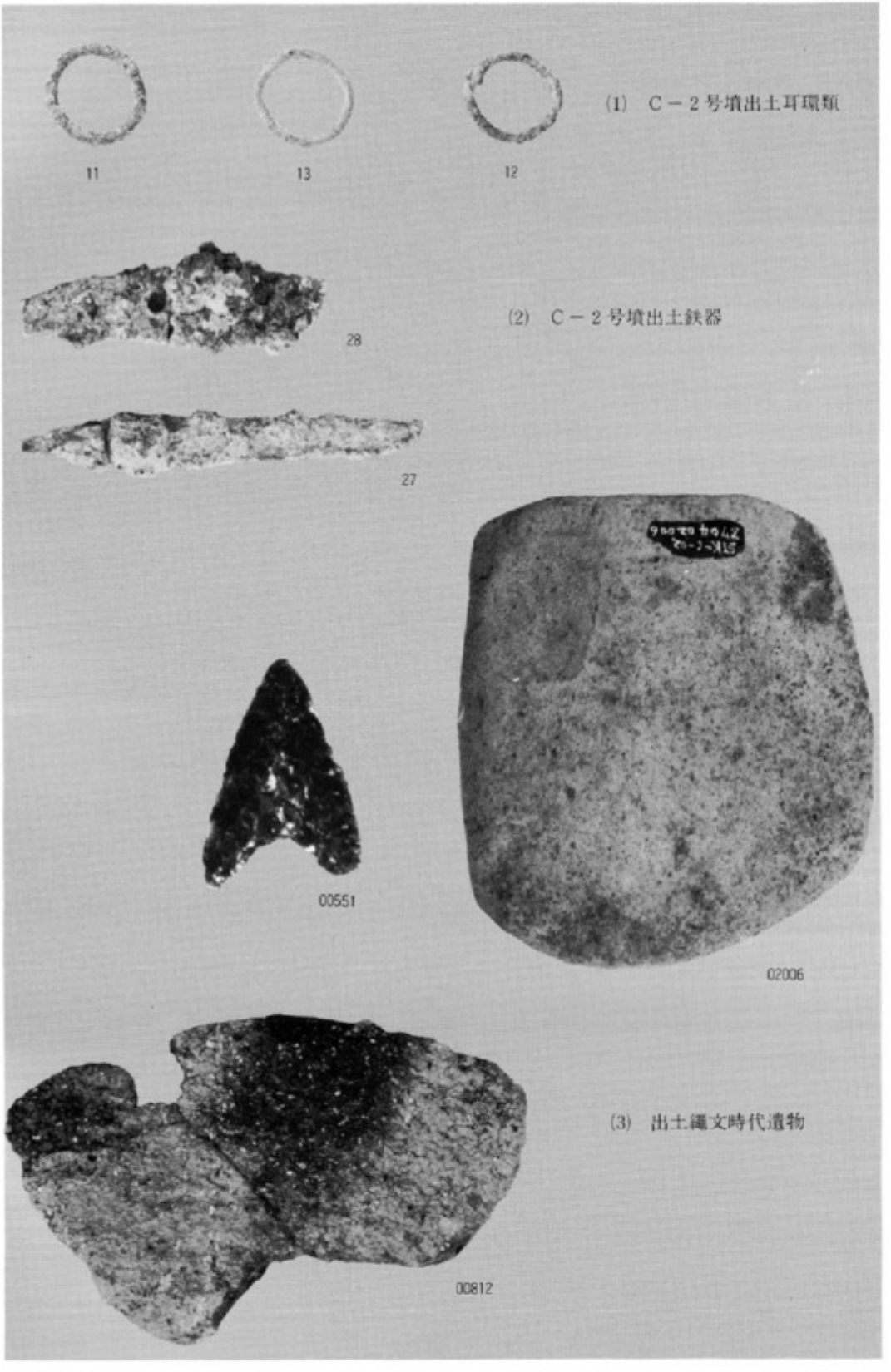
(1) SCOI住居址検出状況（南より）

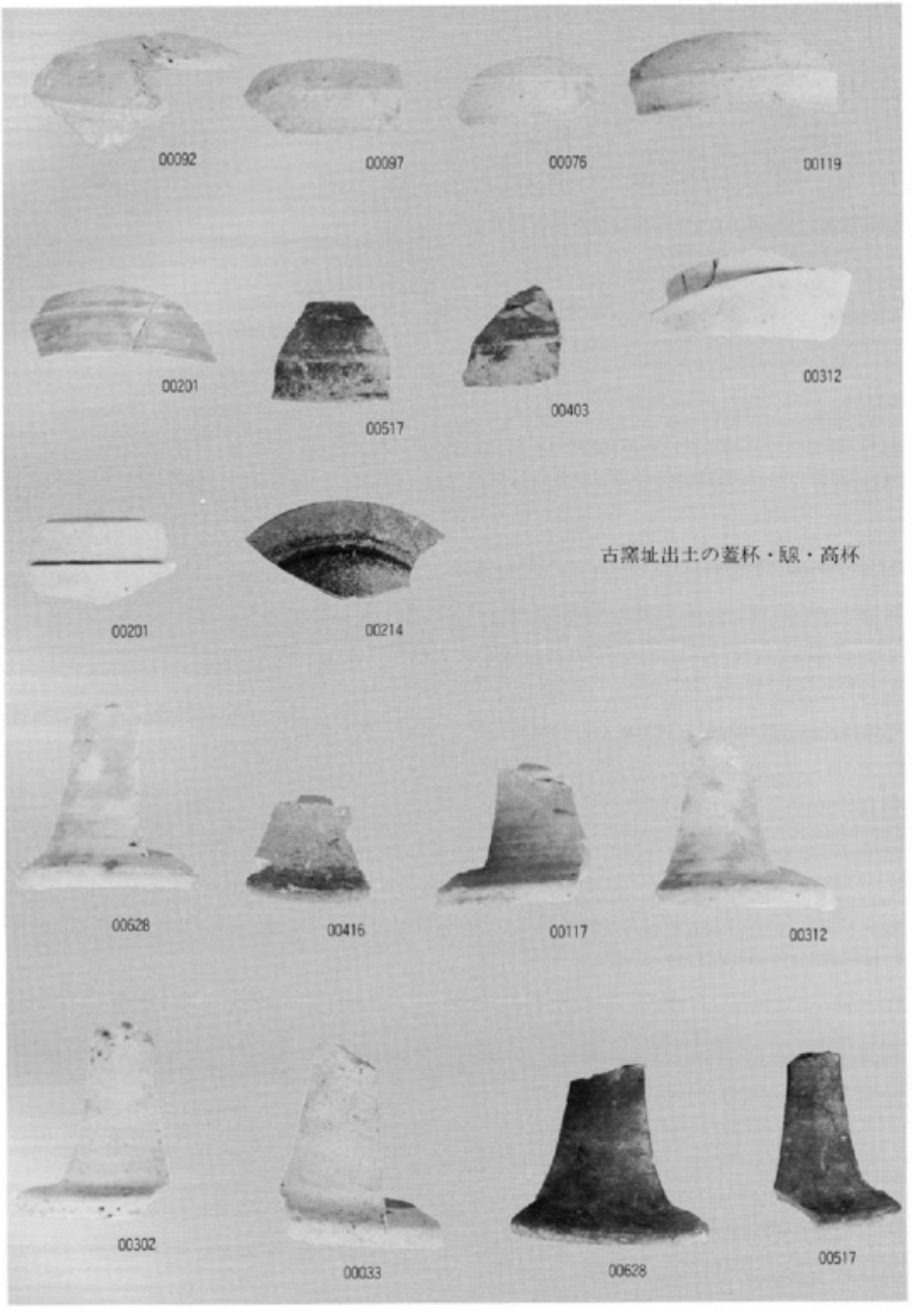
(2) 縄文時代包含層調査区全景（南より）

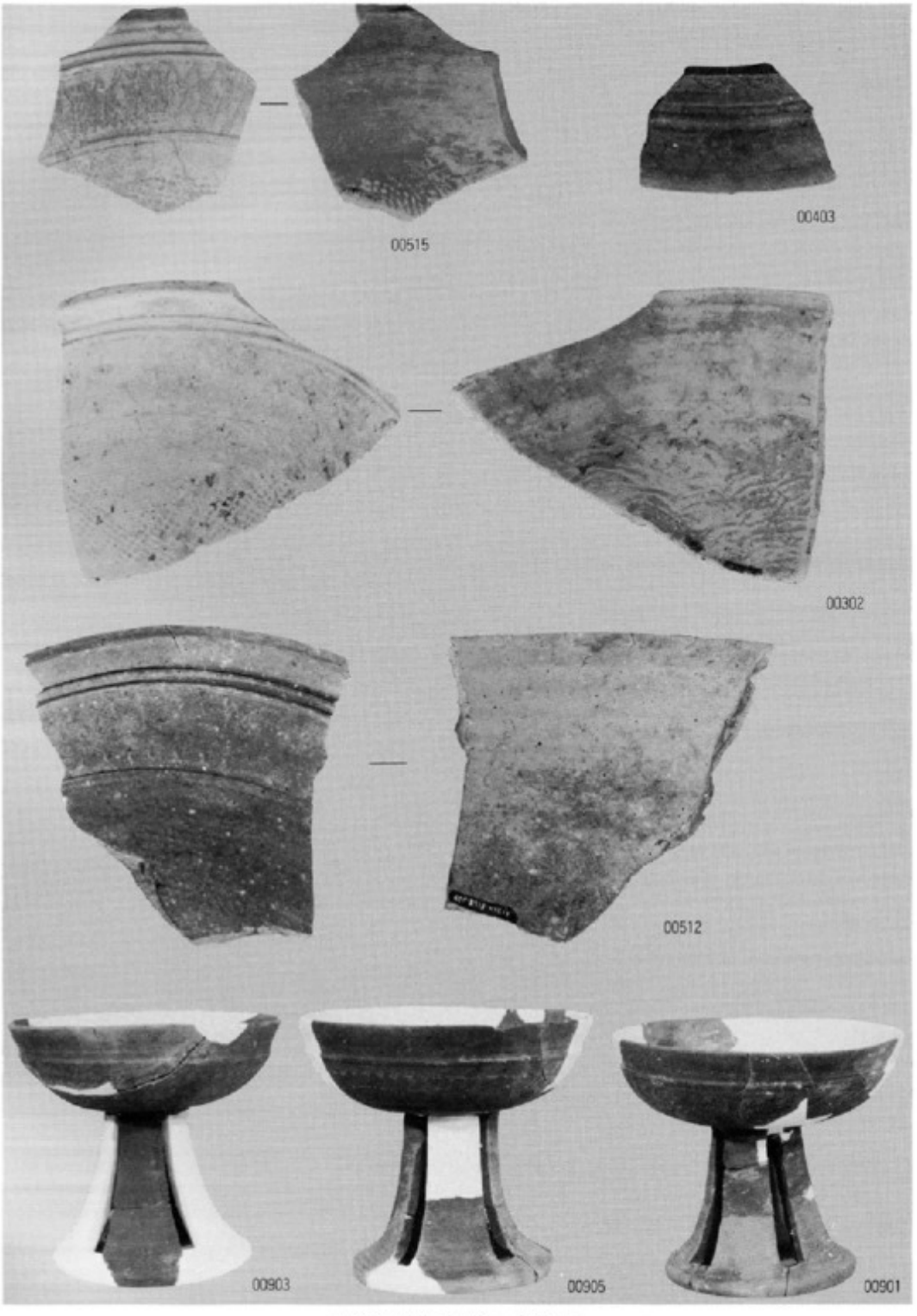
(1) C－2号墳出土須恵器




(2) C－2号墳出土玉類

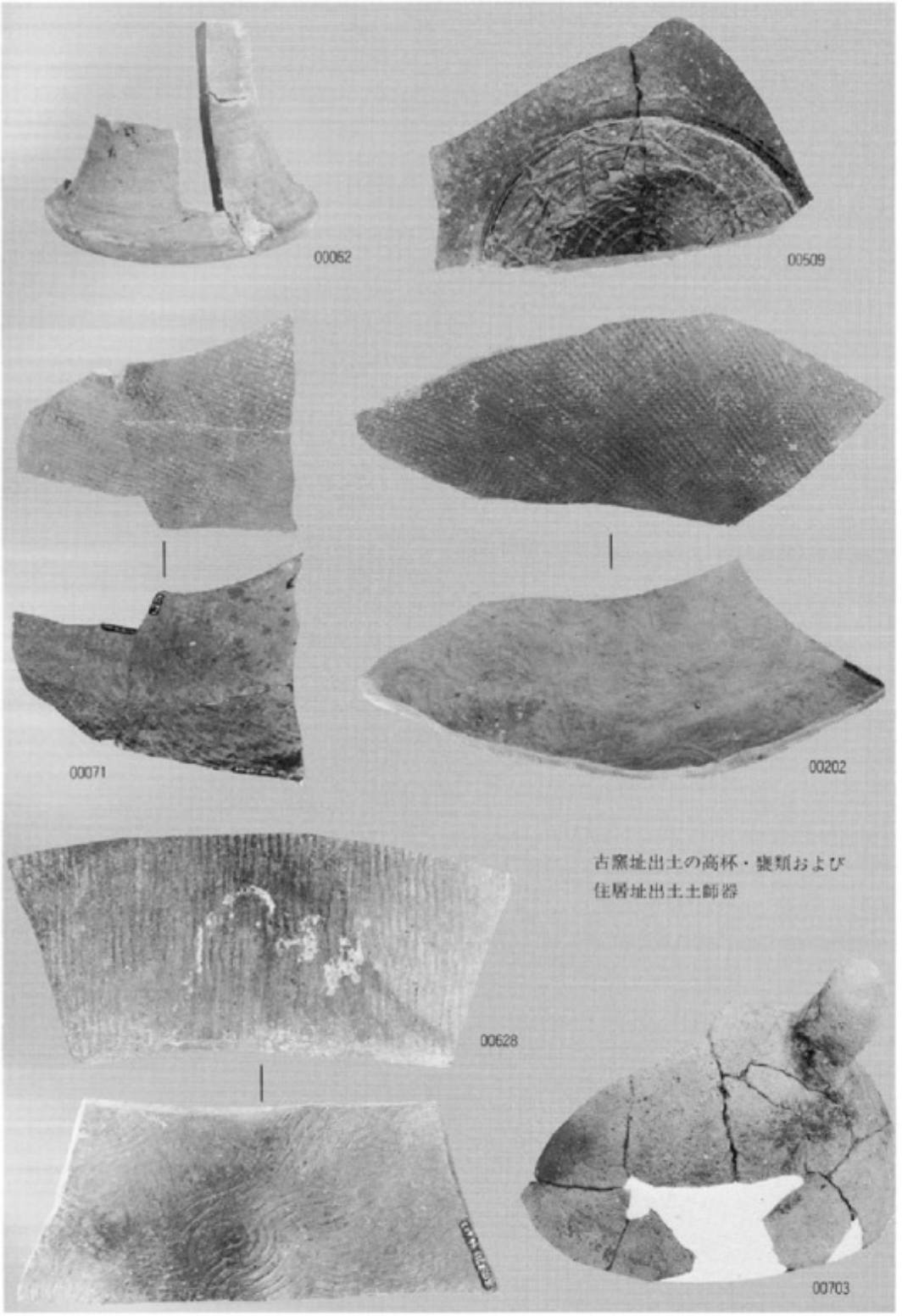

11
13
12
(1) C－2号墳出土耳環類
28
(2) C－2号墳出土鉄器
27
00551
02006
00812
(3) 出土縄文時代遺物


00092
00097
00076
00119
00201
00517
00403
00312
00201
00214
古窯址出土の蓋杯・脚・高杯
00628
00416
00117
00312
00302
00033
00628
00517




古窯址出土の器台・高杯類

Fig. 15




古墳址出土の高杯・甕類および
住居址出土土師器

# 重　留　遺　跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第178集

1988年3月31日

発行：福　岡　市　教　育　委　員　会
福岡市中央区大名2丁目10－29

印刷：福　岡　印　刷　株　式　会　社
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号